平成２８年度　「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」

中間報告書

通信制高校生徒の不登校状態を防ぐ支援体制の構築をめざして

平成２９年３月

福井県立道守高等学校通信制

目次

１、はじめに..... 2
２、テーマ設定理由..... 2
３、研究のねらい..... 3
４、平成２７年度までの取り組み..... 3
＜平成２６年度までの主な取り組み＞..... 3
＜平成２７年度の取り組み＞..... 4
５、平成２８年度の取り組み..... 6
【研究の概要】..... 6
【具体的な取り組み】..... 8
① 全教職員で進める登校生徒の継続出席、欠席防止の取り組み 8
② 教育相談を中心とした取り組み.....18
６、平成２８年度の取り組みのまとめと考察.....22
① 全教職員で進める登校生徒の継続出席、欠席防止の取り組み 22
② 教育相談を中心とした取り組み.....25
７、次年度に向けて.....26

資料.....27

①外部者の支援委員会.....27
②先進校視察.....31
③事例 33

文部科学省　「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」

通信制高校生徒の不登校状態を防ぐ支援体制の構築をめざして

１、はじめに

本校通信制の生徒は、約７割が転編入生である。不登校経験者、学業不振・学校不適応等による中途退学者、経済的困窮者、障害や病気を抱えている者等、様々な学習歴、学習動機をもつ多様な生徒たちである。

小中学校・全日制高校・定時制高校で不適応を起こした生徒一人ひとりを支えることで、通信制高校に適応し、無事高校卒業資格を取得している。しかし、近年入学したものの登校できない生徒、途中で登校しなくなる生徒が少しずつ増えている。本校に来ても学習空白による低学力、長期の不登校による対人不安や集団生活への抵抗が強く、やはり不適応となる生徒がいるのである。担任や相談係を中心に工夫しながら生徒と連絡を取ってはいるが、生徒と円滑にコミュニケーションをとることが難しい場合が多い。中にはひきこもりになる生徒もいる。

本校における入学生徒数に占める卒業生徒数と割合は次の表のようになっている。通信制の入学生徒はそれぞれのペースで１年から数年かけて、６割～７割が卒業している。

入学生徒数に占める卒業生徒数と割合（日曜コースのみ）

	入学者数（人）	年度毎の卒業生徒数（人）									卒業生徒総数（人）	卒業生徒数割合（%）	除籍等（人）
		Ｈ21	Ｈ22	Ｈ23	Ｈ24	Ｈ25	Ｈ26	Ｈ27	Ｈ28	Ｈ29			
Ｈ21	70	6	11	10	18	1					46	65.7	4
Ｈ22	101		9	13	11	25	7	2	1		68	67.3	7
Ｈ23	81			12	16	12	18	2	3		63	77.8	2
Ｈ24	82				14	13	10	6	3		46	56.1	8
Ｈ25	71					5	7	14	6		32	45.1	4
Ｈ26	53						3	9	13		25	47.2	0
Ｈ27	52							5	7		12	23.1	1
Ｈ28	36								4		4	11.1	0
Ｈ29													

通信制においては年間３０日程度の出校日数のため「不登校」と表現するのは適さない。そのため、本調査研究では登録授業の出席数が２回以下の場合を「不登校状態」とする。

２、テーマ設定理由

通信制教育は、働きながら学ぶ青少年に高等学校教育を受ける機会を保障するため、昭和２３年に発足した。しかし、通信制教育を取り巻く環境は大きく変わり、勤労青少年は激減し、さまざまな学習歴、学習動機をもつ多様な生徒が学ぶ場となっているため、通信制高校の教育の質を保証していくことは大変難しい課題となっている。全国の通信制高校のアンケート調査結果からも、成人の入学者の割合は減少し、転編入生の割合が高く、学ぶ目標が不明確で、学習意欲の低い生徒が増えている現状にある。つまり、通信制高校の学習の基本である「自学自習」の困難な生徒が増加しているのである。本校も同様である。

また、通信制高校は全日制や定時制とは異なり、添削指導を中心とし、出席重視の学校ではない。生徒が出校できる状況の時にいつでも対応できる、学べる体制を整えている学校である。しかし、近年通信制高校にも出校できない不登校状態の生徒が増えている。通信制高校は無理に出校させる学校ではないという過去にとらわれ、出校してくる生徒を待つだけという時代ではなくなっているのである。生徒との「繋がり」「関わり」がより重要になってきていると考える。

そこで、これまでも全教職員で議論しながら取り組んできたが、さらに、何とか生徒の不登校状態を防ぎ、生徒一人一人がそれぞれのペースで、それぞれのめざす方向へ社会的自立できないかを探っていきたいと考える。そのためには、組織的に検討したり実践したりする場、支援体制作りが必要であると考え、本テーマを設定した。

３、研究のねらい

本校通信制の教育目標

生徒の高等学校卒業資格の取得とともに、卒業した後に「社会の中で自立して生きていける人間の育成」を目指し、そのための教育活動が営める環境をつくることに努める。

⇩

本研究のねらい

学び直しを求め気持ちを奮い起こして通信制に入学した生徒が高校卒業資格を取得したり、一歩踏み出すきっかけをつかんだりすることで、社会の中で自立して生きていけることをめざす。そのために、本校独自の支援体制を構築し、個々の特徴や状況に応じた柔軟な支援を実践する。

４、平成２７年度までの取り組み

＜平成２６年度までの主な取り組み＞

【学習活動】

制度面からの工夫として、単位制の採用・２学期制導入・月曜スクーリングの増設・個別学習支援日(水曜学習支援)の創設などを行った。また、単位修得を促すための工夫として、ユニバーサルデザイン授業・レポート支援・放送視聴による必要面接時数の代替・複数回の再テスト実施・レポート評価の明確化などを実施した。さらに個に応じた学習支援についてもテストに関する特別配慮や発達障害の生徒に一日のタイムスケジュール作成等の工夫をしてきた。

【教育相談】

年間３０日程度の出校日数の中では捉えにくい生徒の実態把握として、前籍校に提出依頼する「健康調査表」や「相談室からのミニレター」(アンケート)の実施、発達障害・対人不安の強い生徒の就労支援として若者就労支援機関「サポステふくい」との連携を行った。また、卒業後の支援として本校での面談、電話やメールなどでの相談に加え、駅周辺に「心の相談室」を開設し、より相談しやすい環境を作った。さらに、生徒支援に繋げるための保

護者支援として「保護者のつどい」を企画し保護者どうし互いに不安や悩みを話し合ったり、情報を交換したりすることで、少しでも不安を軽減できる機会を設けた。

これらの取り組みにより、卒業や単位修得に漕ぎ着けた生徒も多い。しかし、不登校状態の生徒が増えている現状を捉え、新たな取り組みが必要であると考えた。まず、これまで実践してきたことの見直しとして、生徒への声かけ、関わり方の工夫、生徒への効果的連絡、欠席を始めた生徒に対する早期の関わりについて考えていけないか。また、全体として組織的に取り組む手立てを見つけられないか探っていきたいと考えた。

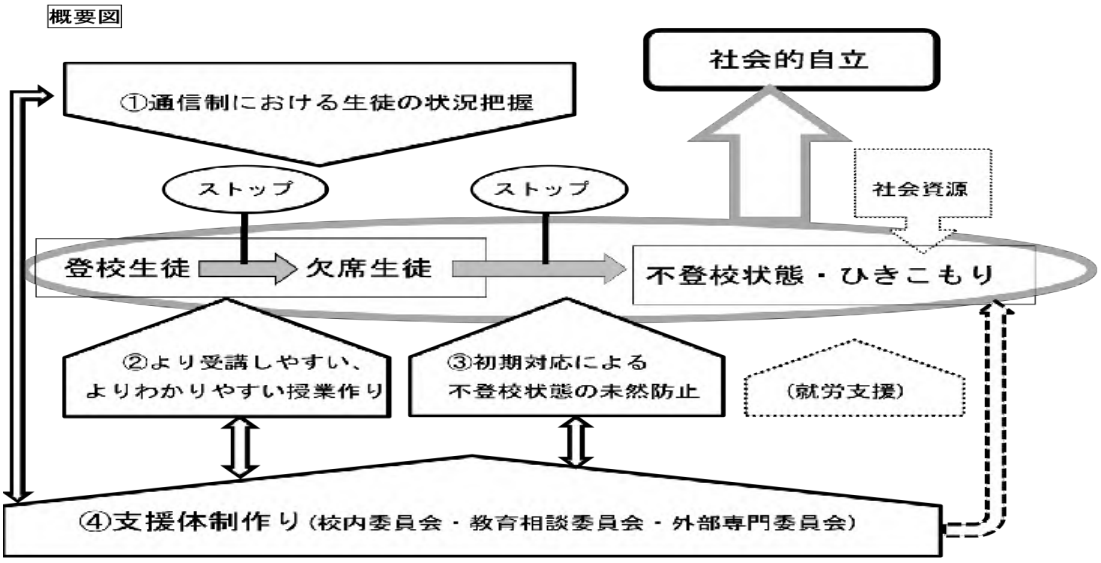
＜平成２７年度の取り組み＞

【平成２７年度（１年目）の研究目標】

Ⅰ　連続欠席生徒へのアンケート送付の試みから、生徒の状況把握や初期対応の効果的方法を探る。

Ⅱ　３つの委員会を立ち上げ、それぞれの委員会の有効なあり方を模索し、本校独自の支援体制構築の基礎作りをする。

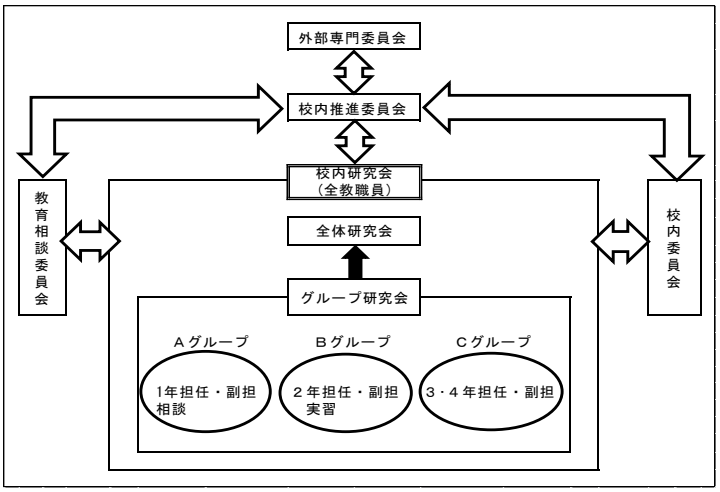
【研究の概要】



連続欠席生徒へのアンケート送付による初期対応から不登校状態の未然防止に取り組んだ結果、送付したアンケートのうち４割の家庭から返事があり、３割近くが登校可能となった。この取り組みだけが要因となって登校が叶ったとまでは言えないが、何らかのきっかけにはなったのではないかと考える。また生徒自らアンケートに答え、面談やメールのやりとりを希望した男子生徒は１４回相談係と面談を繰り返し、気持ちの変化とこの面談の効果を伝えてきた。この生徒はこの取り組みによって学校に繋がるきっかけができ、確実に一歩前に進むことができた。

さらに、より全教職員が問題点や成果を共有し研究を進めていくため、体制の見直しを図った。本研究のねらいである生徒自身の変容は教師の変容から生まれるものであり、生徒のことをより知ろう考えようとする教職員の高い意識が必要である。そのためには全教職員が気持ちを吐き出し話し合える場、共有できる場、コミュニティを作っていくことが重要であると考えた。そこで、新たに研究組織として教職員全体で「グループ研究会」「全体研究会」を実施した。「生徒を話題にして気軽に話せる場を作る」ことは達成できた。

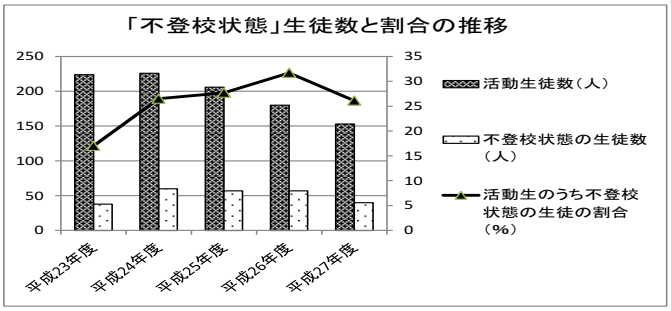
組織図



【研究のまとめと考察】

平成27年度の取り組みによって、実態のつかみにくい通信制の生徒の捉え方について全教職員が改めて考える機会となった。また、他の通信制高校はしない不登校状態を防ぐことや全体で取り組む支援体制にあえてこだわっていきたいと考えた。それは通信制生徒の近年の現状から「繋がること」「関わること」が重要であると感じたからである。生徒と繋がることを考えるには、教員同士が繋がらなければならない。これらをキーワードにさらに実践を積み上げていく必要があると考える。

不登校経験者が７割を占める本校通信制生徒の登校を可能にし、一人でも多くの生徒が一歩踏み出すきっかけをつかむことができるよう取り組んできた。平成２６年度の活動生徒数に対する不登校状態の生徒数の割合は３２．２％であったが、平成27年度は２６．１％に減った。本取り組みによる成果とまでは断言できないが、さらに背景を分析し、生徒と繋がり関わりながら不登校状態を防ぐ努力を継続していくことが生徒の社会自立支援に繋がると考える。



【今後の課題】

①教育相談中心に進めている不登校状態、ひきこもり生徒に繋がる取り組みを継続し、さらに充実させる。新たな取り組みとしてＳＣ・ＳＳＷと協力して学校での面談に加え、校外での相談場所「出張相談所」を置き、より相談しやすい環境を作る。また「保護者のつどい」をさらに充実させるため、本校卒業生の体験談を継続し、加えて家族支援の専門家を招き講演会や相談会を開催する。

②全教職員で進める登校生徒の継続出席、欠席防止の取り組みを修正検討し実践する。研究のねらいと方針について再確認し、全教職員の意思統一を図る。「グループ研究会」・「全体研究会」の持ち方や内容を再検討し、より充実させる。

５、平成２８年度の取り組み

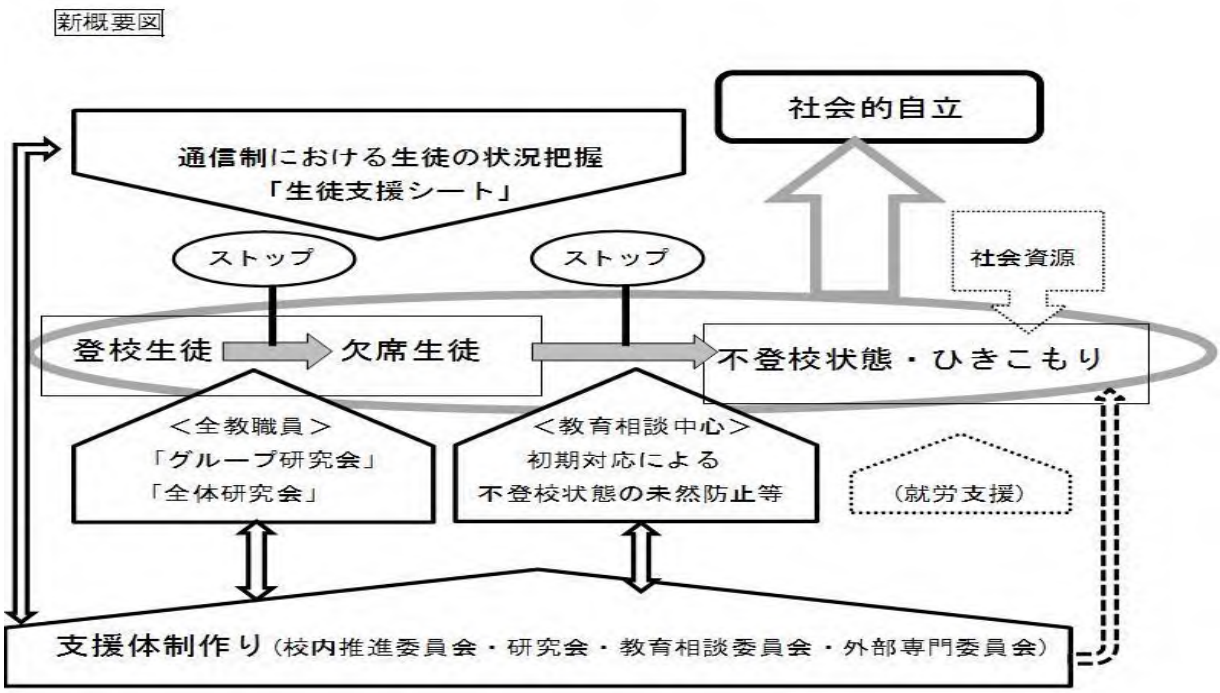
【平成２８年度（２年目）の研究目標】

Ⅰ 不登校状態、ひきこもり生徒の支援に繋がる手立ての充実を図る。
Ⅱ 前年度に立ち上げた委員会を再検討し、より生徒理解や支援、教師の変容に繋がる本校独自の支援体制を探る。

【研究の概要】

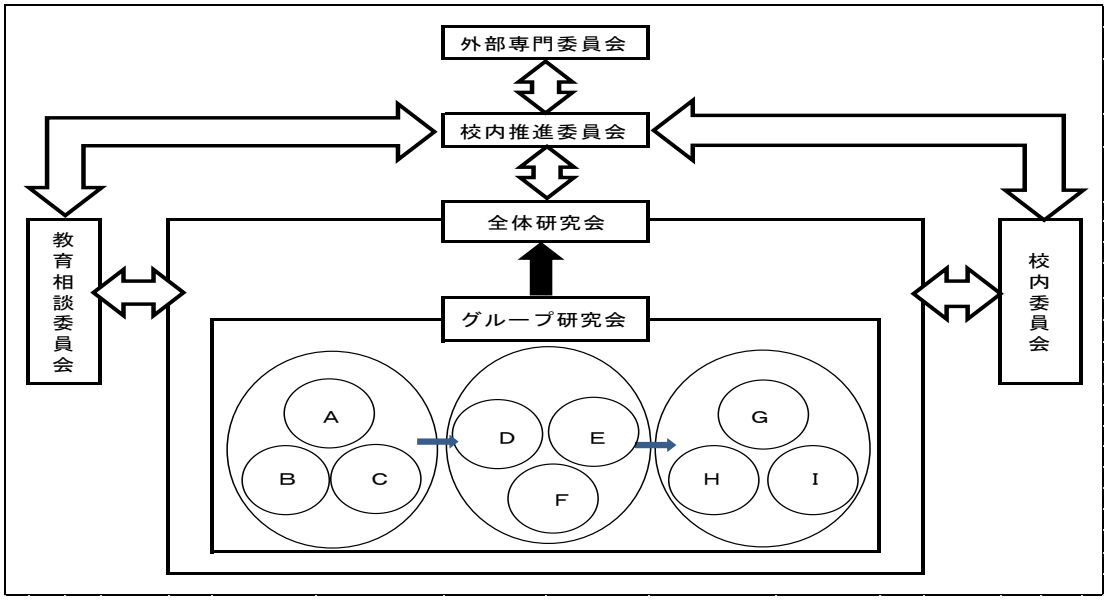
本研究を始めるにあたり、限られた出校日数の中で関わる生徒の実態が捉えにくい現状から、数年間の調査資料をもとに生徒の状況や相談室の状況についてまとめた。また、平成26年度までの本校の取り組みについても振り返り、何に焦点を当てて研究を進めるかについて慎重に検討したのが、昨年平成27年度（１年目）前半の取り組みだった。その結果、まず教育相談を中心に不登校状態、ひきこもり生徒の支援を考えていくことにした。しかし研究を進めながら、中には登校していたはずの生徒が突然不登校状態になる場合もあるので、既に不登校状態、ひきこもりの生徒だけを対象にしていても不十分ではないかという疑問が出てきた。不登校状態を防ぐには、登校生徒の継続出席、欠席防止の取り組みも不可欠であると気付いたのである。

そこで平成28年度は、教育相談を中心とした取り組みを継続しつつ、昨年度始めた全教職員による生徒理解や支援をより充実させ、意識の変容に繋げたいと考える。そのためには個々の生徒の状況や特徴を捉える具体的な手立てが必要である。全教職員で共有できる方法を検討しながら研究を進めていきたい。



また、それぞれの実践を検討する各委員会等も見直し支援体制の構築を図るため、組織を再検討した。

新組織図



【実施計画】

28年度	実施計画				備考
4月	・前籍校からの「健康調査表」による早期状況把握 ・入学生に対して「相談室からのミニレター」(アンケート)を実施し、初日の生徒の状況を把握				
5月	・2回連続欠席生徒の家庭に「相談室からのお願い」(アンケート)を送付し、その都度状況を把握	・推進事業検討会議 ・校内推進委員会 ・教育相談委員会	・グループ研究会 ・全体研究会	出張相談	
6月		・校内推進委員		「保護者のつどい」	
7月		・教育相談委員会 ・外部専門委員会	・グループ研究会 ・全体研究会	出張相談	
8月		・校内推進委員		・不登校　講演会	石井志昂氏
9月	・前籍校からの「健康調査表」による早期状況把握 ・入学生に対して「相談室からのミニレター」(アンケート)を実施し、初日の生徒の状況を把握				＊(校内委員会)
10月	・2回連続欠席生徒の家庭に「相談室からのお願い」(アンケート)を送付し、その都度状況を把握	・教育相談委員会 ・外部専門委員会	・グループ研究会 ・全体研究会	「保護者のつどい」	講師 金馬宗昭氏
11月		・校内推進委員			
12月		・教育相談委員会			
1月		・校内推進委員	・グループ研究会 ・全体研究会	・先進校視察 出張相談	＊(校内委員会)
2月		・校内推進委員会 ・教育相談委員会 ・外部専門委員会			
3月		・推進事業検討会議			中間報告書作成

＊(校内委員会)は各委員会や研究会の中で必要となったとき開催する。

【具体的な取り組み】

① 全教職員で進める登校生徒の継続出席、欠席防止の取り組み

「校内推進委員会」

構成員：校長、教頭、教務代表、担任会代表、相談室担当

本事業の推進役としての役割を担っており、本年度の研究の進め方を話し合うとともにグループ研究会や全体研究会の持ち方の検討、当日の資料の準備、司会進行も推進委員が務めた。また、６頁の組織図にあるように全ての委員会や研究会と双方向の矢印でつながる本事業の核となる委員会でもある。

第１回　４月１９日（火）

① 本年度、構成員の交代が数名あったため、まず本事業の１年目の取り組みについて、特に教育相談を中心とした説明を行い、ここまでの共通理解と検討を行った。

② ２８年度の方向性として「本校独自の支援体制を構築して、個々の特徴や状況に応じた柔軟な支援を実践する」ことを決めた。

第２回以降は、委員会の名称をグループ検討会（グループ研究会検討会）とし、グループ研究会や全体研究会の前に必要に応じて開催した。

第２回　５月６日（金）

① 通信制生徒支援シート案の検討

・１限～６限目の授業中の様子と授業以外の時間の様子とにわけるとよいのではないか。例えば、非常勤の先生もあまり項目が細かくない方が書きやすいのではないか。

・日曜日のスクーリング以外の状況も表の後ろに加えてあると、平日の様子が分かるのではないか。

・生徒の進路希望等や興味関心、声掛けに配慮が必要な内容等も共有できるとよい。

・「書き込み例」があるとよいのではないか。

課題

・登校させることが通信制の目的なのか。その生徒のニーズは何かによる。そのニーズを知るため、生徒の実態を把握し共有することが大事なのではないか。

・「守秘義務」の徹底が重要。意識レベルのことなので具体例で常に確認すべき。

・そもそも「生徒支援シート」は何に生かしたいのか。１つは、登校可能となりそうな生徒を見つけ出すためのもの。

第３回　５月１１日（水）

① 通信制生徒支援シート(改訂版)の検討

・具体的な取り組み「全教職員で進める登校生徒の継続出席と欠席防止」に繋げるためのものである。

・全教職員の共通理解と意思統一に役立てる。

・守秘義務を意識したうえで何をシートに盛り込むか。学校生活(授業)を進めるうえで必要なものを入れる。担任として知ってもらいたいこと(必要な情報)を記入する。
ex）健康状態、アレルギー、校外での出来事、面談での様子
・LH(SH)への出席状況がわかる。興味関心。進路については？
・但し、全教職員が情報を共有することでの弊害にも注意が必要。
・シートは、前期末に見直すこともある。

② グループ研究会
・継続出席と欠席防止のためのグループ研究会であり、具体的な取り組み「全教職員で進める登校生徒の継続出席と欠席防止」につなげる。
・ピックアップした生徒に関わる教職員で（教科で）グループ編成を検討。

第４回　５月２３日（月）

① グループ研究会（5/19）の報告

【1 年】
・このシートが、最終的には個人シートとして、例えば科目の流れが分かるとありがたい。反対意見はなし。

【2 年】
・シートについて、生徒との関わりがわかれば便利。反対はなく、前向きにやっていこうという空気。どこまで情報を記入するかとまどいもある。全部をかくのではなく気になることのみ書く旨、再度説明。グループ編成替えもあり。

【3 年・４年】
・シートについて、自分以外の授業の様子も知りたい。あの先生に話した事を他の先生がなぜ知っているのか、とならないか心配する声も。守秘事項は赤字で入力。月曜スクーリングのみの生徒もいるので平日の欄を大きく。中学では気づいた事をカードに記入して共有している、打ち込みを副担が担うのはどうか。クラスとしては書きやすいが、日付をくっていかないと分かりづらい。記入に使い、その後生徒個人の一覧にして変容が分かるように。

② 全体研究会の持ち方
ⅰ）今年度の取り組みについて（上道）(7 分)
ⅱ）グループ研究会の報告　　シートについて、話題になった生徒について(3×3 分)
ⅲ）全体研究会(各グループ 15 分話し合い＋5 分発表)
ⅳ）質疑応答
ⅴ）まとめ（教頭）

第５回　７月１１日（月）

① 全体研究会（5/24）を受けて「生徒支援シート」の検討

【生徒支援シート(田中作成)】
・「担任から伝えたいことなど」を「伝えたいことや質問」に訂正
・平日(月スクなど)の様子(6 月 5～9 日)を(6 月 6～11 日)　に訂正

【「生徒支援シート」の入力に際して】

・㊀:遅れてきた生徒（または中抜けや早抜け）の状況 など出欠状況報告の１(出席)or0(欠席)だけでは分からない１の中身について記入
・回答は黒字で記入
・緑文字入力はやめて、赤や青文字を優先して使用
・1～6 校時以外の書き込みには、誰の記入か確認がとれるように最後に(名字)を記入

第６回　１０月２０日（木）

①　G研究会（7/12）の持ち方について

〈グループ分け〉１組系統と２組系統に分ける。

研究会Ⅰ(201 教室)　井上博、田中、黒田、野村、鈴木、吉川、上山、立尾、(校長)

研究会Ⅱ(203 教室)　宇埜、岡部、井上明、宮崎、上道、乙部、中村、(教頭)

〈内　容〉

（１）「生徒支援シート」の運用状況と改善点

・感想、気づいたこと、負担感、現時点での改善点など

（２）現時点で全体共有すべき生徒について

・各クラス担任からの報告

・意見交換

〈準　備〉当日の会場準備は、13:00～

・サイボウズ＋レジメ(教頭)　　・生徒の顔写真(上道)

・シート　１組(鈴木)・２組(田中)

〈意　見〉

・今後、何か書いてある生徒をシートに残す。

・3 月頃までこれでいって、次年度にむけ 12 月くらいから絞り込む。

・相談室のルール徹底に担任団が協力。

・保健室の状況については教頭先生が記入している。

・現システムを変更してまで、少人数に焦点をあてた体制を作るのが、はたして良いか。特別支援学校のようなことはできない。

第７回　１２月６日（火）

①　先進校視察について

・日程・準備物確認

・質問事項（通信制のシステムと生徒へのアプローチ、研究組織、研究実践、不登校生への自学自習が可能な教材、研究成果等）

⇒　H28視察のホルダーの中に、質問事項を各自、箇条書きで記入（氏名）。1/17のG検討会で、誰がどの質問をするか確認。

②　　Ｈ２８年度中間報告書の作成について

５．平成２８年度の取り組み　における【具体的な取り組み】の(担当者)

ⅰ）教育相談を中心とした取り組み(上道)

ⅱ）全教職員で進める登校生徒の継続出席、欠席防止の取り組み(田中)

ⅲ）支援体制作り(真鍋)

⇒ 12/20(火)中間報告書編集会議①、以降は定期的に検討会

第８回　１月１７日（火）

①　先進校視察について

質問事項の確認と担当(別紙参照)

②　Ｈ２８年度中間報告書の検討②

５．平成２８年度の取り組み　における【具体的な取り組み】の〈担当者〉

ⅰ）校内推進委員会（グループ検討会）〈鈴木〉

ⅱ）全教職員で進める登校生徒の継続出席、欠席防止の取り組み〈田中〉

ⅲ）教育相談を中心とした取り組み〈上道〉

ⅳ）推進事業検討会議・外部専門委員会〈真鍋〉

③　G研究会(1/24)の持ち方について

〈グループ分け〉前回同様、1組系列・2組系列で分ける

〈内容〉

ⅰ）これまでの継続生徒や新たに出てきた気になる生徒（後期転編入生を含む）についての報告・意見交換

ⅱ）生徒支援シートの活用状況やその有効性についての意見交換

④　全体研究会の持ち方について

・３グループに分け、G研究会(1/24)をもとに意見交換。代表が発表し、記録は箇条書きで。

・別班の意見を知るため、グループ研究会後に提出された「感想シート」を資料として準備。

第９回　１月２５日(水)

①　全体研究会(1/26)の持ち方について

ⅰ）グループ研究会での報告内容および意見交換について

・グループ研究会の感想シートを印刷配布し、紙上で確認する。

ⅱ）本年度の成果と次年度に向けての課題について

・前回の全体研究会以降（10月30日から1月15日のスクーリングまで）の生徒支援シートを印刷準備し、本年度の成果と次年度に向けての課題について意見交換を行う。

・職員会の並びで3つのグループに分け、進行は推進委員、記録はグループで決める。各項目15分ずつ計30分間の意見交換を行う。記録者が話し合いの内容を発表する。

〈準備物〉・レジメ、感想シート、記録用紙

②　H28年度中間報告書の作成の目安について

５．平成28年度の取り組み

【具体的な取り組み】

ⅰ）校内推進委員会（グループ検討会）〈鈴木〉

ⅱ）全教職員で進める登校生徒の継続出席、欠席防止の取り組み〈田中〉

ⅲ）教育相談を中心とした取り組み〈上道〉
ⅳ）推進事業検討会議・外部専門委員会〈真鍋〉は、資料として掲載
各担当が持ち寄り、２月１日に編集会議

② 先進校視察報告(職員会議1/26)

第１０回　２月１日（水）

① H28年度中間報告書の作成について
６．まとめと考察(担当)
ⅰ）校内推進委員会（グループ検討会）〈鈴木〉
ⅱ）全教職員で進める登校生徒の継続出席、欠席防止の取り組み〈田中〉
ⅲ）教育相談を中心とした取り組み〈上道〉
20頁～23頁　田中が校正
23頁～　　上道が校正

② 事業計画書の検討

③ 外部専門委員会の打合せ
3月終わりの職員会議で中間報告書の配布とともに、来年度の方針の説明や教職員の意識付けを行う。

第１１回　２月６日(月)

① H28年度中間報告書について
６．まとめと考察の校正検討(担当)
p20～23の校正（田中)、p23～の校正（上道)

② 外部専門委員会の打合せ
20頁以降の6.平成28年度の取り組みのまとめと考察を中心に説明
ⅰ）H28年度中間報告書の概略説明（真鍋)
ⅱ）全教職員で進める登校可能な生徒への支援（田中)
ⅲ）教育相談を中心とした取り組み（上道)
ⅳ）H29年度事業計画（真鍋)
ⅴ）事例（上道)

第１２回　２月８日(水)

① 報告集作成について
2月中に原稿完成、2月28日に編集会議

② 来年度の体制について
・教育相談にサブをつけて2名に、あわせて推進委員を5名体制に
・3月28日の職員会議で中間報告書の配布、来年度の研究方針・組織について説明。
田中よりプレゼンを予定。

生徒支援シート

〔生徒支援シート創設のニーズや背景〕

本文科省事業２年目の研究実践を始めるにあたっては、研究組織を前年度（１２月）に再編した上で、新たに職員全員で取り組む本格的な実践のスタートとなった。実践研究の柱となるメインテーマ「全教職員で進める登校生徒の継続出席、欠席防止の取り組み」の下、新たな取り組みを着手させる上でまず念頭に置いたことは、

①各教職員の生徒に対する普段のかかわりを基調とする。

②かかわりを持った内容等について、教職員誰もがいつでも振り返ることができる形式で記録として残す。

の二点である。

その理由や根拠としては、生徒が学校へ出校するのは日曜日のみ（一部の生徒は月曜日も出校するが全員ではない）であるため、教職員が生徒に対して関わりを持つことが出来るのは日曜日に限定される。それは自ずと生徒に対する時間的な限界や制約がある中でのかかわりという形になることを意味する。この点を考慮しつつ、教職員全員で共通認識の下 新たな実践を進めていくためには、なるべく負荷のかからない形での実践が望ましいとの認識に基づいている。換言すれば、教職員がこれまでの勤務経験や指導の場面等々で培ってきた指導の方法や技術を十分に踏まえ、教師一人一人の持ち味を活かしつつ、それらを継承・発展し積み重ねていくプロセスの中にこそ、新たな研究実践となる鍵があると方向付けた。

かねてより、担任同士の定期的な生徒情報交換会や校務部による生徒への支援状況等、生徒への指導の状況やその様子については、それぞれが独立した指導やその成果として校務部や担任ごとに累積されていたが、こうした状況と本研究実践での生徒の様子や記録等々を、何らかの形で統一された記録体として可視化させたいとの新たなニーズや機運が推進委員会の話し合いで持ち上がった。

〔生徒支援シートの運用にあたっての目的や共通理解事項〕

生徒の欠席を防止するための指導について、グループや全体で話し合ったり深く追究したりする上で欠かせないこととして、教職員それぞれが行っている指導の内容や生徒の様子などを手短に簡易記録し、その内容等について他教職員などがいつでもその情報を共有することができる必要性が挙げられる。この記録簿的な形式のものを一つのまとまったデータベースとして校内ザーバー上に置き、教職員全員で継続した記録を取る取り組みをスタートさせた。生徒支援シートの運用にあたっての主眼となる観点は次の二点である。

①出校している生徒の様子や教職員とのかかわりなど、日常の気づきを簡易記録する。

②今後、累積されていく生徒へのかかわりや指導記録群の中から、当該生徒に対する次なる教育支援を教職員全員で見いだし、それをもって当該生徒の連続した登校支援の一助とする。

また、本シートを全教職員で運用する上での共通理解事項項目ごとに依頼的文言で文書化し、教職員全員にプリントアウトし配付した。（※①生徒支援シート および ※②配付文書は、次の通り）

※①生徒支援シート（一学級分）

通信制 生徒支援シート

1年1組　　【6】月【5】日の様子

No	生徒番号	氏　名	伝えたいこと 質問事項など	1校時	2校時	3校時	4校時	5校時	6校時	SH、昼休み、巡回 放課後、部活動など	その他 校務部関係	平日（月スクなど）の様子（6月6～19日）
1												
2												
3												
4												
5												
6												
7												
8												
9												
10												
11												
12												
13												
14												
15												
16												

・提案に際し、本シートに具体的な記入例を記載した形で提案し、実践を開始する上でのイメージが湧くようにした。
・グループ研究会で一次提案をし、推進委員による変更箇所等を修正。
・全体研究会で二次提案し、その後、取り組みを開始した。

推進委員会で本シートの原案を作成。第１回グループ研究会と全体研究会で提案し概要説明等を行う。

【シートの概要】

・記載内容は、主に生徒とのかかわりの中でのちょっとした気づきや様子など。
・学級単位でのシートであり、スクーリング実施日の生徒の活動や様子について記載できる形式。
・日曜スクーリングでの様子が一覧できるようになっており、さらにその右欄には翌月曜日からの平日の様子などについて特記すべき事項等を記載できる欄を設けている。
・年度末まで、スクーリング実施日ごとにシートを作成。年間の生徒の様子等について総覧可能なものとする。
・本シートは校内サーバー上に置き、全職員がいつでも閲覧可能な状態のものにする。（閲覧の際は、専用パスワード入力）

※生徒支援シートの入力に関する全職員共通理解事項を記載した配付文書

「生徒支援シートの入力に際して、以下の点について全職員で共通理解を図りたいと思います。

１.入力を開始する日

・入力開始は、６月５日（日）のスクーリングの様子からです。出欠入力と併せて行うようなイメージでお願いします。

・ファイルの場所： ¥通信制 ¥通信（共通）¥16日曜コース出席簿　　の中の「エクセルシート」です。

・パスワード：半角英数で【○○○○】です。

２.シートの入力について

○活動（あるいは出校、授業に出席）している生徒を対象とした先生方の「ちょっとした気づき」を入力していくシートです。全員分の入力ではなく、その都度、数名程度ピックアップして入力して下さい。

○生徒のあら探しをするシートではなく、「気づき」を基にした支援を見つけていくためのシートとお考え下さい。

講座担当者（含 非常勤）の入力について

・欠席した生徒のコメント入力は不要です。

・授業に出席した生徒の様子など数名程度簡単に入力します。全ての出席生徒の入力ではありません。

例：遅れてきた生徒（または中抜けや早抜け）の状況。今まで来なかった生徒が出席した。他の授業での様子を教えて欲しい･･･など、「気づき程度の些細な内容」で構いません。

・ノルマ的なものはありませんが、一つの授業につき２～４名程度の生徒を目安に記入して下さい。

・後日、他の先生がこのシートを見た時に、記載してあることについての共通認識を持てたら良いです。

担任団の入力について

・受け持ちクラスの生徒の中で、出校がある程度安定している生徒について、他の先生方にどうしても知っておいて欲しい内容等がある場合は「伝えたいこと」欄に入力して下さい。

例：生徒の特性や特質、健康面や精神面でのこと等々、いろいろな観点で構いません。

授業時以外の入力について

・休み時間、巡回時、部活動等々でのコメントは、かかわりのあった先生などで随時入力して下さい。

例：ＬＨ時や昼休みの進路面談。進路ガイダンス参加者。巡視の際の声かけの事実など。

入力時の色分けについて

・入力に際し、文字の色分けを下段のように使い分けて下さい。

赤文字入力：守秘義務を含む内容の場合。かかわった先生との信頼関係を崩さないよう、記載内容を見た他先生は、生徒の個人情報の扱いに特に注意して下さい。

青文字入力：他の先生方にこのシートを使って尋ねておきたい内容を含む場合。

黒文字入力：上記以外の内容の場合。

・色分けの判断に迷う場合には、赤や青文字を優先して使用して下さい。

氏名の記載について

・記載された内容について、後日、教員間で話し合いを持つ可能性が考えられます。「もう少し詳しく話し合いたいが、誰が記載したのか不明なので話し合えない。」という状態を確実に避ける上でも、コメント入力に続き氏名の入力をして下さい。

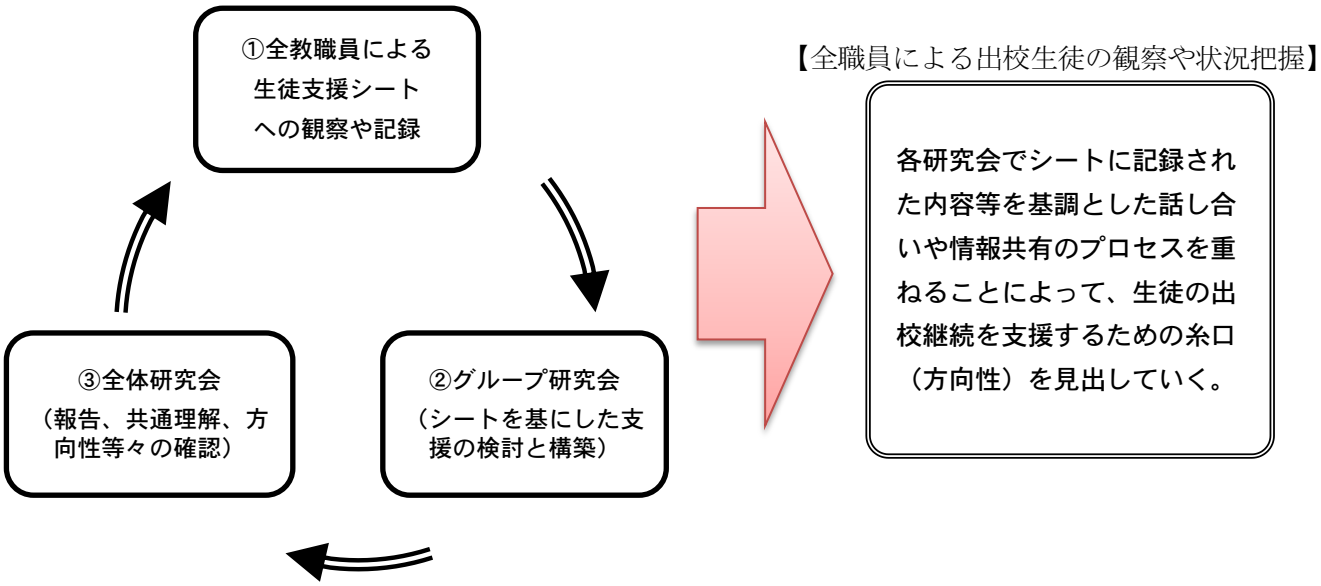
生徒支援シートを用いた研究実践のスタートにあたっては、ここに示したシート記入例および共通理解事項をセットにして全職員に配付した。（６月５日（日）より実践を開始した。）

〔生徒支援シートを活用した二つの研究会〕

前述のように運用する上での共通理解事項を踏まえて、６月以降、生活支援シートの本格的な運用や活用を行っていった。前述『研究の概要』で示した「新概要図」のうち、本実践に特化した取り組みのイメージは下段の通りとなる「《取り組みイメージ》」。

イメージ化の便宜上、三つの教育的活動には①②③の番号を付した。この数字は序列や順位性を示すものではなく、三つの活動がそれぞれ各々独立した研究実践活動ではあるものの、常に一貫性持った研究活動であり、それ故に一連の流れの中で実践展開されてきたことを示すものである。さらに付け加えれば、「③全体研究会」を経て「①生徒支援シートの記録」へとフィードバックすることで新たな教育的支援の構築や両研究会の一層の深まり等が十分に期待できるものとの認識の下、実践を積み重ねてきた。

《取り組みイメージ》



本年度は、年度末までに大きく４回のグループ研究会と、同様に４回の全体での研究会を行った。このことから、６月以降の各研究会での協議の様子や全教職員での研究会等について、次ページに四別した形でその研究の足どりを示すこととする。「《本年度における二つの研究会の足どり》」

また、年間を通して両研究会を行うにあたっては、各研究会の前後に校内推進メンバーによる推進委員会や検討会を持ち、当該研究会で話し合う協議内容の精選や次研究会へ向けた修正や調整等々を行ってきた。（詳細は、前述『支援体制づくり』欄参照）

《本年度における二つの研究会の足どり》

グループ研究会	全体研究会
【５月１９日】 ○今年度の実践を始めるにあたり、本研究の目標や目指す方向性である校内における支援体制づくりについて、以下の二点を確認する。 ①「不登校、引きこもり生徒の支援につながる手立ての充実について」は、主に教育相談を中心とした支援体制づくりである。 ②「全教職員で進める登校生徒の欠席防止と継続出席の取り組み」は、定期的にグループ研究会と全体研究会での研究協議を重ね、①とは別の支援体制づくりを構築していく。 ○具体的な取り組みとして、推進委員より「生徒支援シート」を案の形で示し、協議を深める。 ○推進委員からの補足説明として、負担がないように記入し、登校生徒で支援すべき生徒を見つけるものであることを伝えた。	【５月２９日】 ○第１回グループ研究会を受けてシートについての意見交換を行う。そのさい全体を３つの小グループに分け、グループセッションを行った。三つのグループの協議内容を列挙する。 ①グループ：進路指導に関する内容も書き込めると良い。情報のない生徒が逆に危ない。簡単な生徒のプロフィールがあると良い。問題行動を書き込むと複雑な家庭環境がわかってしまう場合がある…等。 ②グループ：担任としてはありがたい。どの情報まで入力するかが問題。特定の生徒が対象になると思う。逆にシートを通して担任から非常勤の先生へのお願いの場にもなるのでは。非常勤の先生にも負担にならないように問題点の見えたものだけとりあえず入れてもらう…等。 ③グループ③：口外しないことは赤、質問したいことは黄色など色分けすれば目立ってよい。特に赤の多い生徒は以後協議しやすくなる。進路ファイルの活用ができていなかったのであまりしばりは強くないほうがよい…等。 ○本シートの提案について、全体から強く反対意見が出なかったことから、次回スクーリングから支援シートを運用することを決めた。また推進委員で本研究会の意見を基にシート運用上の方針や申し合わせ事項等を文書作成して、提案することを伝える。
【７月１２日】 ○全職員を、研究会Ⅰと研究会Ⅱの二つのに研究グループに分け、以下の二点について協議した。 ①生徒支援シートの運用状況と改善点について。 ②現時点で、全体共有すべき生徒について各クラス担任からの報告および意見交換など。 ○②の意見交換や報告については、生活支援シートを活用した上での生徒の絞り込みであり、より新たな生徒支援を見出すための報告であるとの認識で行った。 ○本校では単位制を採用している高等学校であるが、便宜上クラス担任制（全８学級）を敷いている。このことから、各クラス１名の生徒を担任が絞り込んで気がかりな生徒として報告した。 ○担任からの報告を受け、生徒の抱えている状況や家庭環境等々について、グループ内で共有し、今後のかかわりの一助とすることとした。 ○全職員を二分した研究会であるため、他方のグループ協議内容等については、７月１４日の全体研究会で報告し合い、シェアリングすることとした。	【７月１４日】 ○第２回グループ研究会での協議内容について全体での報告を行った。絞り込んだ８名の生徒について、各学級担任からの詳細な説明や報告と共に、他グループからの意見や質問等も交えて共通理解を深めた。 ○気がかりな生徒については、今後も担任を中心として観察や見守りといったかかわりを通して、支援を継続していくことで一致した。
【１０月２５日】 ○本研究のスーパーバイザー的な位置づけとして、第３回グループ研究会以降二名の外部専門委員を交えてグループ研究会を行う。 ○参加した二名の外部専門委員には、各研究会で支援シートそのものの活用、記録の際の具体的な視点やポイント、研究会での協議内容等々について、指導や助言を仰ぐこととした。 ○二名は、本校近隣の大学等の教授など。 ・福井医療短期大学　教授：森透氏 ・福井大学教職大学院　客員教授：小嵐恵子氏 ○この研究会で協議した内容は以下の通り。 ①２回目の研究会で名前の挙がった生徒についての経過報告。 ②後期、新たに気になる（あるいはなり始めた）生徒について、学級担任からの現状報告。当該生徒について今のところ考えている支援やアプローチの方法など。 ○各クラス担任からの報告後、各グループでの意見交換を行う。	【１０月２７日】 ○第３回グループ研究会での協議内容について全体での報告を行った。第２回研究会で絞り込んだ８名の生徒のその後の状況や様子について、各学級担任からの説明や報告を行った。他グループからの意見や質問等も交えて共通理解を深めた。 ○１０月２５日のグループ研究会で外部専門委員から受けた指導や助言について、全体で共有する。内容は以下の通り。 ・グループ研究会は頻繁に行われると良い。 ・気になる生徒の報告は、その生徒の観察と観察によって蓄積された諸々の情報の整理となる。これが大事だ。 ・他職員の報告などを聴くことで自分の着眼点との差異や新たな発見ができる。 ・研究会を通し、生徒の実態が浮き彫りになってきたのではないか。みんなの共有財産として残ることになる。 ・次の関わりや声かけ等々、支援の新たなイメージがこの会を開くことでできたのではないか。これこそが本研究会の意義だと考える。 ・次回はその中でチャレンジしたエピソード等を報告できると良い。

《本年度における二つの研究会の足どり　その②》

グループ研究会	全体研究会
【１月２４日】 ○二つの小グループによる研究会。一つのグループに外部専門委員：小嵐恵子氏参加。 ○第３回研究会同様、名前の挙がっている気がかりな生徒の様子についての経過報告（担任より）。 ○年度末が近いこともあり、単位修得や学年進級といった観点から生徒の状況を説明する場面があった。 ○次年度に向けての今後のアプローチの方法や、支援を展開する上でのポイント等についても意見交換された。 ○支援シートを用いた全職員での取り組みについての振り返りの時間を持った。 ①活用してみてどうであったか ②生徒に対する支援として有効であったか といった点について意見を交換した。 ○一年間を振り返ってという視点で、「成果と課題」について全職員にワークシートを配り記載した。	【１月２６日】 ○全体を３つのグループに分け、研究会を行った。 ○成果と課題について記載された全職員のシートを集約し、協議のテーマとした。 ○協議後、グループごとに発表し、全職員で感想も含めた協議内容の共有化を図った。 ○来年度に向けた課題や改善点、さらにはそれら基調とした具体的な実践の提案などについては、年度末の全体研究会で推進委員会より全職員に提案という形で行われることを伝達。

② 教育相談を中心とした取り組み

〔欠席生徒への初期対応による不登校状態の未然防止の取り組み〕

昨年に引き続き２回連続欠席した生徒にアンケートを送付し、現在の状況・家庭での様子などについて把握し、生徒との繋がりのきっかけ作りを目指した。

平成２８年度　「欠席生徒への初期対応による不登校状態の未然防止」取り組みの状況報告

※ 担（担任）・相（教育相談係）・カ（ＳＣ）　　H29. 2. 20

	送付日	クラス	生徒氏名	返送日	返送者	備考	面談	電話	メール	家庭訪問	その他
		1の1	Ａ男				4/10相 4/13相 4/20相 4/26相 5/10相 5/23相 6/23相 9/8相 10/6相 10/27相 11/10相 11/24相 12/15相 1/24相 2/6相 2/16相				
		1の2	Ｄ男				4/28カ 5/19カ 6/9カ 6/16カ 6/23カ 7/14カ 10/6カ 10/20カ 11/17カ 1/26カ				
1	5月9日	1の1	ａ男								
2			ｂ男								
3		4の1	ｃ子								
4	5月12日	1の1	ｄ男			5/22　登校					
5	5月24日	1の1	ｅ子	5/30	母						
6		4の2	Ｋ男								
7		4の2	Ｕ子	6/5	保護者						
8	6月13日	1の1	ｆ男								
9			ｇ子								
10	6月29日	4の2	ｈ子								
11	11月8日	3の2	ｉ男	12/8	母						
12		3の2	ｊ子	12/11	保護者						
13	11月21日	1の1	ｋ子	12/4	本人	11/27～登校			12/10		

２年連続送付生徒

昨年度から引き続き面談を継続している生徒（Ａ男・Ｄ男）が２名、今年度アンケートを送付した生徒は１３名である。そのうち返事があったのは５名で、登校可能になった生徒は２名である。

〔生徒支援に繋げる保護者支援の充実〕

「保護者のつどい」

保護者との面談から、保護者どうしが語らえる場を設けたいと思い、平成２５年度に初めて「保護者のつどい」を企画した。保護者どうし互いに不安や悩みを話し合ったり、情報を交換したりすることで、少しでも不安を軽減できる機会を設けたい、そしてこの保護者の支援が生徒に繋がっていくことを願って実施している。

年度	日時	内容	参加保護者数
平成２５年度	11/22(金)	SC講演『不登校生徒に寄り添って』・保護者どうし語らい	１５名
平成２６年度	① 6/20(土)	SC講演『うちの子、何にストレスを受けやすい？』・保護者どうし語らい	１２名
〃	②10/24(金)	SC講演『生涯発達という考え方』・保護者どうし語らい	８名
平成２７年度	① 6/21(土)	卒業生体験談『通信制で学んで一今、自分を振り返ってー』・保護者どうし語らい	６名
〃	②10/23(金)	ひきこもり体験者講演ビデオ『ひきこもるキモチ』・保護者どうし語らい	９名
平成２８年度	① 6/18(土)	卒業生体験談『通信制で学んで』・保護者どうし語らい	３名
〃	②10/14(金)	家族支援専門家講演『不登校・ひきこもりの我が子との接し方』・質疑応答	１０名

参加した保護者数は多くはないが、参加した保護者のアンケートによると、毎回好評価をもらっている。

平成２８年度はさらに深めて、県外から家族支援の専門家を招いて講演を企画した。講演時間をできるだけ確保したいので、保護者どうしの語らいはせずに質疑応答の時間を設けたところ、保護者の質問が次々と出された。心に響く講演を聴き、我が子と照らし合わせて質問が湧き出てきたのだ。中にはその後講師の先生とメールのやり取りをする保護者もいた。一人一人それぞれの悩みを抱え、何とか解決の糸口を必死で求める保護者の思いが伝わってきた。

「出張相談」

今年度から、学校に繋がりにくい、遠方に住んでいる生徒や保護者、学校に対して抵抗がある生徒等により相談しやすい環境を作るため、ＳＣ・ＳＳＷと協力して校外の相談場所「出張相談所」を置いた。面談できる環境を整えることで、不登校状態やひきこもり生徒を支援に繋げたいと考えた。

＜卒業後約２年間引きこもっている男子生徒の母親面談＞

第１回…平成２８年５月１０日(火)１３:３０～１５:００

最寄りの駅までコミュニティバスが１日数回走る、半島の湾岸の町に住んでいるため、学校まで面談に来るには高速道路を使っても車で２時間以上かかる。そこで、学校と自宅との中間地点の文化センターで、ＳＣと相談係が保護者面談を実施した。

まず生徒の現在の状況を詳しく話してもらい、特に気がかりなことを尋ねた。息子の将来について何とか生きていけるようになってほしいと母親は切実に訴えた。それを受け、無理をしないことを前提に具体的な声掛けや支援施設との関わりなどを提案をした。

第2回…平成２９年２月２日(木)１３:３０～１５:００

前回面談から約９ヶ月経過しているのでその間の状況を話してもらった。参加すべき地区の行事や母親の退職など変化や刺激の中で、無理なく息子への声掛けをしていた。その中で長く伸びた髪を自分で切ったり、夕食はほぼ毎回家族と食べたりするなど変化を感じた。また最近は荒れたところがなく、気持ちが落ち着いていることも報告してもらった。

提案として、日々の「気づきメモ」用紙を渡し、書ける範囲で無理なく文字にしてみてほしいと伝えた。母親自身の振り返りや思考の癖の気づきに役立てばよいと考えた。

〔教職員の意識向上〕

「不登校新聞」の配布

今年度から「不登校新聞」を全教職員（ＳＣ・ＳＳＷを含む）で購読するようにした。毎月２回発行され、その時その時の話題や統計結果など知らない情報が常に掲載されていて、生徒理解にとても役に立っている。また最もこの新聞の魅力は、当事者の声が至る所に出ていることである。講演を聴くより、心に響き感動することも多い。全体的に偏りが無く、様々な分野の取材がなされ、中身も面白く読みやすい。

「教育相談研修会」

○日　時　　平成２８年８月３０日(火)　　１３：３０～１５：３０
○講　師　　石井　志昂　氏（『不登校新聞』編集長）
○会　場　　通信制視聴覚室(北校舎２階)
○講　演　　「不登校の苦しさ、構造とアプローチ方法」
○質疑応答

石井氏は、中学2年生から不登校となる。その後フリースクール「東京シューレ」 へ入会し、19歳からは創刊号から関わってきた『不登校新聞』のスタッフとなり、10年前から『不登校新聞』の編集長を勤めている。これまで、不登校の子どもや若者、識者など300名以上に取材を行なってきた経験から、不登校の定義・心身の状況・本人及び親へのアプローチ方法・回復までの地図について分かりやすく話された。

〔不登校状態・ひきこもり生徒の理解と対応〕

「教育相談委員会」

構成員：本校のＳＣ(3名)・ＳＳＷ、教頭、教育相談係

相談の専門の立場から、相談活動の情報交換や問題を抱える生徒に対する意見交換をすることで、不登校状態を未然防止する方法や既に不登校状態にある生徒の支援方法を話し合う。

第1回　5月30日

・構成員の自己紹介

それぞれ曜日毎に相談を担当しているため、この委員会が唯一顔を合わせることにな

るこの委員会で、お互いの現状を報告し合う。

・関わっている生徒の事例紹介

ほぼ授業には出席できず、定期的にＳＣのカウンセリングを受けている生徒や医療機関にかかっている生徒の状況を報告し合い、意見交換を行う。

・「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」紹介

教育相談の取り組みについて紹介し、協力を依頼する。また、取り組みの内容についてアドバイスをもらう。

第2回　7月4日

・本事業の教育相談の取り組みである「保護者のつどい」(第1回)と「出張相談」の報告

・同じく「欠席生徒への初期対応による不登校状態の未然防止」の取り組みについて

生徒の欠席状況を中心に、特に気になる生徒を一覧表にし、意見交換を行う。

生徒一覧から、学校に馴染みにくい発達障害の生徒・自分で自分のハードルを高くし自分に駄目出しをする完璧主義の生徒・継続してこつこつ取り組むのが難しい生徒が欠席に繋がっているのではないか。欠席初期にアンケート等でモチベーションを上げていく、伴走者の役割が必要であるという意見が出された。

授業出席から見る、特に気になる生徒一覧(Ｈ28.7.4現在)

	授業出席状況	現在の状況	備考
1	0	発達障害。ケース会議を続けるが睡眠リズムが不安定で学習意欲が高まらない。早朝3時間バイトを始めた。	●
2	5/22～欠席	バイトをしている。連絡がつかない。	●
3	0	昨年度から出席無し。働いていて連絡もつかない。(25歳)	●
4	0	昨年度から相談室で教育相談係が定期的に面談を継続。	
5	6/19～欠席、7/3出席	4/17に出席して3回連続欠席。アンケート送付後２回出席するがその後また欠席。(20歳)	●
6	5/22～欠席、7/3出席	H22入学したが2月に退学。H28再入学。(22歳)	●
7	0	中学にはほとんど登校できなかった。4月より始めたバイトが楽しい。集団の学習は苦手と話す。	
8	5/8～欠席	母よりアンケート返送。どうしても学校に行けない。状況を見ていきたい。	●
9	0	SCとカウンセラー室で本人・母親と定期的に面談を継続。	
10	0	中学時も長期欠席。人と関わることが苦手で顔を上げられない。家の中で過ごす。母親「ゆっくり見ていきたい。」	
11	0	本人が言うにはうつ病で眠剤も飲んでいる。本校在籍8年目。(38歳)	
12	0	起立性調節障害。昨年11月中頃まで成績優秀で無欠席だったが、その後全欠。毎朝欠席の連絡有り。	
13	0	働いている。休学を希望している。	
14	0	自動車整備のバイトをしている。登録はするが日曜日は辛いと言って授業に出られない。	
15	4/24以外欠席	前期の授業は諦める。体調を崩していた(骨折や胃腸炎)。遊びに出かけている。	
16	0	体調が悪いらしい。	
17	4/17､5/8以外欠席	(22歳)	
18	0	仕事の都合。(24歳)	
19	4/24以外欠席	自動車学校に通い、もうすぐ免許が取れる。(卒業した妹からの情報)	
20	0	コンビニでバイト。担任が電話をしても出ない。母親は繋がりたい。(24歳)	
21	0	バイトをしている。学校に行く意味が見いだせない。母親は本人の気持ちを優先したい。	
22	4/17､4/24以外欠席	母親が不安定。母親によると、本人は勉強する意味があるのか。母親に反抗するようになる(23歳)	
23	0	SCとカウンセラー室で母親と定期的に面談を継続。(30歳)	
24	0	担任とメールのやりとりは可能。夫婦喧嘩をして夫が出ていく。	●
25	0	独り暮らしと兄の経営する美容室の手伝いを始める。学校に気持ちは今はない。(20歳)	
26	6/19～欠席	連絡をしても繋がらない。ラインも既読にはなるが返信無い。クラスの友人が卒業して頼れなくなった。	●
27	4/17以外欠席	スクーリングの日の朝には親から欠席の連絡がある。バイトをしている。	●
28	4/17以外欠席	妻と喧嘩をしてしばらく行方不明だったが、連絡は取れるようになったらしい。(妻からの情報)	●

〈備考〉● アンケート送付

第3回　10月17日

・関わっている生徒の事例紹介と質疑応答

Ｎ･Ｋ（20歳男）中1から不登校。母(時には両親)・生徒とＳＣと定期的に学校で面談。家の中でネットをしている。元気に話はするが、現実感が持てず、動き出せない。

Ｔ･Ｙ(卒業生男)在籍中も母親の面談を定期的に続けていた。主に家庭の問題と進路相談であったが、卒業後はブラック企業的就職先であることへの不安を訴えている。

Ｕ･Ｔ(30歳男)7年間ひきこもり。家の中で明るいニート。精神的病気が背景にある。母親がＳＣと定期的に面談をしながら、母親の心の安定に繋げている。

他数名の生徒についての状況報告があった。どの事例も環境や自身の問題が複雑に絡んでいるので、解決策までは出されなかったが、共有することができた。

・「教育相談研修会」の講師選定

これまでの経験や実践をもとに、講演者のリストを挙げてもらった。

第4回　12月12日

・相談活動報告(主に事例紹介)と質疑応答

前回からの変化を中心に報告してもらう。大きな変化や進展はないが、共有することで関わりの課題が整理され明確になった。

・本事業の教育相談の取り組みである「不登校新聞」について

今年度から始めた新聞購読について、率直な意見を出してもらった。読みやすく、共感しやすい。中身も面白く、偏りが無い。さらにこの新聞の活用法を工夫するなら、家族や生徒に読んでもらうとよいのではないか。全部を読むというより、関心がありそうな所を抜粋して提示することには大変価値がある。

第5回　2月13日

・相談活動報告(主に事例紹介)と質疑応答

継続して面談を続けているひきこもり生徒の現状を報告

・今年度の反省

本委員会のあり方について活発な意見交換がなされ、会の中では情報交換が為されたが、全体との関わりが薄かったことが反省点として挙げられた。

・次年度の取り組み

本委員会が全体組織の中で関わりをもっていき、支援により繋がるよう具体的に次のことを取り組みたい。教職員全体の「事例検討会」に本委員(ＳＣ・ＳＳW)も参加し、事例を発表したり、指導助言をしたりするなど積極的に関わっていきたいという意見でまとまった。また、本校で取り組む「事例検討会」についてのアドバイスももらえた。

６、平成２８年度の取り組みのまとめと考察

① 全教職員で進める登校生徒の継続出席、欠席防止の取り組み

「校内推進委員会」(グループ検討会)

今年度は本委員会のメンバーが教頭以下３名新しく入れ替わった構成でのスタートとなった（定期異動や各部署で順番に委員を選んでいる関係上)。これまで本校は、校務部単位での校務遂行上の話し合いや協議あるいは実践発表等々は展開されてきたが、全校体制での大きな一つの研究テーマを柱とした実戦や研究協議については、その実績が乏しい面があった。そこで、平成２７年度の１２月には研究の組織や構成等を再編し、改めて研究の方向性を模索していくこととした。その中で本委員会を研究の推進機関として位置づけ、全体で取り組む研究の舵取り役を担ってきた（詳細は７ページ)。

研究の二年次でもあるため、研究テーマや目標Ⅰ・Ⅱの具現化に資するコーディネートを意識し、事前の打ち合わせや検討会議を昨年度以上に開いてきた。その際、常に念頭に置いた重点としては、

『全職員が実践を積み上げる際、具体的に何を、どのように、どんな方法や手段によって、さらにどのタイミングや機会に実践していくのか、について明確にする。』

という点であった。このことはすなわち、当該委員会としてのはっきりとした責務を認識することが全体で取り組む研究の深化へと結びつき、さらに言えば、委員一人ひとりが明確なビジョンを持つことで全職員がテーマや目標に向けた見通しをもって実践を積み重ねることへと繋がる、ということである。委員全員のこうした共通認識をベースとして、本年度の取り組みを推進した。

加えて、６ページの組織図からも明らかであるが、本委員会は研究のコア的立場でありながら同時に黒子的立場という性質を有している。今年度、委員全員がお互いの意思を疎通しながら途切れることなく委員会を開催してきたこと、その上で全職員での取り組みが大きな混乱もなく積み重ねられたこと、二つの研究会が定期的に開かれ教師全員が協議したこと…等々の経緯からは、目標Ⅱとして掲げた「生徒の理解」や「教師の変容」へと繋がる有効な手立てが講じられたと捉えることができる。

しかしながら本委員会のこうした立ち位置や責務は今年度限りのものではない。来年度以降も本意委員会を十分に機能させ、多様な支援を展開するための司令塔として常に全体をコーディネートしていく推進力を保ち続けていくことが、最も重要な課題であると考える。

生徒支援シート

大きなプロセスとしては、グループ研究会と全体研究会を連動した一つの研究会の単位とし、年間計４回にわたって全職員による研究会の場を設定し、小グループや全体での協議を重ねてきた。ここに本年度の足どりを振り返り、その成果と課題について記載する。尚、成果や課題については１月のグループ研究会時に意見や感想を記載するシートを配付し回収した。黒太字はその中の一部抜粋引用。

【成果】

まず大きな成果としては、設定した研究テーマ・目標Ⅱに沿って全職員が一つの取り組みを行ったことやそれらに基づく話し合いを重ねてきたことが挙げられる。このことはこれまでの通信制には見られなかった新たな面である。感想シートには、

○（この研究を）全員で取り組めたことが大きな成果である。〔３人〕

とあるように、全員で研究を推進しようとする雰囲気の醸成、意識の変容が見られた。

また、一つのテーマに絞って実践や協議を重ねることで、いろいろな指導方法や生徒支援があることを認識でき、職員同士が学び合うことができたことも大きな成果である。

○担任以外の先生の見立てを知ることが出来たのは良かった〔３人〕

○このような研修会を持つことでいろいろなアプローチがあることを知ることが出来た。

○（職員）一人ひとりの、生徒を見ようとする意識が高まってきている。　…など。

指導の方法一つを例にとっても、それぞれがバラバラで混沌とした状態だったものが、お互いに話し合いやコミュニケーションを繰り返すプロセスを通して、大まかな共通認

識をお互いに形成することができたことは、生徒に対して多様な教育を展開していかなければならない本校職員にとって、大きな成果ではなかろうか。

生徒支援シートを活用した具体的な実践を進める上で、推進委員会から年度始めに生徒支援シートの提案や記載上の共通理解事項等々を例示したことによって、全職員が統一された共通理解の下、大きな混乱もなくスムーズに研究実践に着手できた。このことは、全職員が具体的に何を、どのように、どんな方法・手段に基づいて実践していくのかについて、実践を重ねていく上での重要なポイントであり、この点において全職員の意識と実践が、昨年度以上に研究テーマ・目標Ⅱへと近づいたと言える。提出された感想からは、

○今年度支援シートが形となり、気がかりな生徒を把握することができ、大きく役立っている。

○支援シートに（生徒の）情報を書き込むことで、日頃の教育実践に、一層注意深く取り組むようになったと思う。

という内容が伺えたことからも、このことは裏付けることができる。支援シートに記載された記録を基に、全職員が生徒についての話し合いや情報を交換することで、その後の当該生徒への新たなかかわり方や支援の仕方を考える一助になったことは大きな成果としてあげられる。

【課題】

１月の研究会では、今年度の取り組みを踏まえ、反省点や課題さらには来年度への要望等についても協議した。

○科目担当者としての授業後のシートに関して、特定の生徒に対しては似たような内容の記載が重なってしまい、有効的なシート活用が見いだせなかった。

○自クラスシートについて、学級担任は全職員が記載した後を見計らって、どのような内容が記載されているのかを読まないといけない。

○遅刻や忘れ物など、ややもすると生徒の劣っている面での記載に偏る傾向があった。今後は優れている、あるいは良い面を焦点にした記載もしなければいけない。

支援シートの記載そのものに終始し、有効的な活用にまで至っていない場面や情報が十分に共有できない面が見られたことは来年度への課題として挙げられる。支援シートのパターン化を防止し、一層有効的な活用を見出したりするための新たな取り組みを模索していく必要性が浮き彫りになった。

また、来年度に向けた研究の方向性を協議する場面では、具体的かつ建設的な意見も数多く出され、全職員での申し送り事項として意識づけを行った。

○支援シート活用日を設けたりプリントアウトしたりして、配付するのはどうか。

○６月から続けてきた支援シートをある程度似た傾向でまとめ、特に成功例を挙げて分析し、マニュアル的なものができると良い。

○今後は支援シートを基に、特定の生徒の事例に絞って専門家の意見も交えながら小グループで話し合うことで、多様な支援の方法に結びつくのではないか。

来年度はこうした意見に基づいて、支援シートの取り組みを継続しつつ、研究会等での話し合いをさらに重ね、本校独自の新たな支援体制の構築を目指したい。

② 教育相談を中心とした取り組み

〔欠席生徒への初期対応による不登校状態の未然防止の取り組み〕

２回連続欠席生徒対象にアンケートを送付した生徒数は昨年度の約半分であった。半減要因は、担任から提出されるアンケート依頼生徒数が少なかったからである。これは、担任の方で欠席理由や生徒の状況をつかんでいるため、アンケートに頼らなくても良いと判断した生徒が多かったためと考えられる。担任が連続欠席生徒についてより積極的に状況を把握するようになったことは、成果の一つではないかと思われる。また、担任が依頼用紙を提出する際、送付すべきかどうかの相談があり、担任と相談係との情報交換の機会が増えた。この取り組みのねらいである「不登校状態を未然に防ぐ」ことまではまだ多くは届いていないが、教師の変容や連携強化には繋がったのではないかと思われる。

〔生徒支援に繋げる保護者支援の充実〕

「保護者のつどい」に欠かさず参加してくれる保護者がいて、そのうち２名の生徒が登校可能になった。しかもその２名は２年半～３年間授業に出られず、ひきこもっていた生徒たちである。１名は、２年半の間には登録をしない休学状態の時期もあったが、「保護者のつどい」の案内は送り続け、保護者も欠かさず参加してくれた。突然生徒から登校したいと言うようになったとき、生徒の状況を共通理解していたので、あまり最初から頑張りすぎないよう保護者とよく話し合い、協力して慎重にスタートを切らせた。今順調に単位を修得している。もう１名も、３年間ひきこもっていたが、そろそろ学校に行きたいと言い出した。親子の関係ができているので、保護者が生徒の不安を丁寧に受け止め、その不安を保護者から学校が知り、1つずつ不安を取り除きながら登校を支援することができた。この生徒も順調に単位を修得している。時間はかかったが、保護者の支援が生徒支援に繋がったと思われる事例である。

〔教職員の意識向上〕

教育相談研修会では、「不登校新聞」の編集長の講演を行ったところ、後のアンケートに大変有意義で良かったという感想がほとんどだった。さらに、次回希望する研修内容の問いに対して、今までにない多くの意見が寄せられた。講演を聴いた教職員の心に響き、自分自身の問題とした捉え、意識の向上が図られたと推察できる。

〔不登校状態・ひきこもり生徒の理解と対応〕

「教育相談委員会」は日頃個別に相談活動をしている担当者が集まれる貴重な機会となっている。相談の専門家の意見に新たな気づきや手立てのヒントを得ることができる。教育相談の相談対象生徒は容易に改善できず長期化している場合がほとんどであるため、相談担当者の心のケアにも繋がっている。

一方、今年度最後の「外部専門委員会」の中で、「教育相談委員会」の組織のあり方や実践内容について質問が出た。「教育相談委員会」では、相談の専門家による長期不登校状態、ひきこもり生徒を中心にした情報交換や意見交換をすることで不登校状態の未然防止や支援方法を話し合う委員会として組織した。また、当初は難しい問題を抱える生徒について教職員のアドバイザー的役割をも担う委員会をイメージしていた。しかし、本委員会を運営する教育相談係の意識の中に、教育相談委員は不登校状態、ひきこもり生徒を担当し、教職員は登校可能な生徒を担当するという役割分担ができてしまっていたことや、教職員からの相談を本委員会に取り込む仕組みが確立されていないため、互いの関わりが希薄に

なってしまったという反省が残った。

今年度は昨年度の継続取り組みに加え、研究目標Ｉに掲げた不登校状態、ひきこもり生徒の支援に繋がる手立ての充実を図るため、新たに「出張相談」の実施や家族支援の専門家による講演会を開催した。また初めて月２回の「不登校新聞」購読を実施することで教職員の生徒理解や意識の向上を図った。

平成２６年度の活動生徒数に対する不登校状態の生徒の割合は３２．２％、平成２７年度には２６．１％に減少した。今年度平成２８年度は２８．０％と増加したが、これは全生徒数が約３０名減少したためで、不登校状態の生徒数は減少している。数字だけでは捉えられないが、昨年度からの取り組みの成果が現れたものではないかと考える。

不登校状態・ひきこもり生徒と直接対面する機会は少なく、一人一人事情も経緯も環境も違う。多くが長期にわたって家庭中心の生活をしているため、現状を変えることは容易ではない。いつ変化が現れるかは本人にも分からない。しかし、複数の種を地道に蒔くことで芽を出すことがある。考えられる方法を尽くして、きっかけ作りをしていく必要がある。そのためにもさらに個に焦点を当てながら諦めずに支援を続けていきたい。来年度の「保護者のつどい」は、個別相談会というスタイルを検討している。また、「教育相談委員会」と全体との関わりを深め、より有効な支援体制を確立させたいと考える。

７、次年度に向けて

次年度は、２年間で構築した本校独自の支援体制の中で、個々の生徒への具体的支援を実践し、支援体制の有効性を検証したい。

〇全教職員で取り組む事例検討会

昨年度創設した「生徒支援シート」をもとに、「グループ(全体)研究会」の中で、全教職員が事例を発表し、質疑応答、講評をもらいながらよりよい支援を実践していく。個々の生徒を追っていくことで、生徒の捉え方の気づきが生まれ、教職員の変容が生徒の変容に繋がっていくことをめざしたい。

〇教育相談における個別支援の充実と「教育相談委員会」の機能の充実

これまで講演会と語らいを内容としてきた「保護者のつどい」を個別相談会とし、より個に応じた相談の場を設ける。不登校状態の生徒は一人一人違うため、保護者は我が子の場合を相談したいと願っている。保護者支援が生徒支援に繋がっていくことをめざしたい。

また、「教育相談委員会」でも事例検討会を行い、長期対応が必要な生徒の支援の糸口をつかみ、それぞれの生徒に応じた社会自立に近づけたい。さらに、全教職員で取り組む事例検討会に教育相談委員（ＳＣ・ＳＳＷ）も参加し、事例発表や指導助言をもらうなど「教育相談委員会」が支援組織の中で全体と関わりながら、教職員支援を充実させたい。

資料

①外部者の支援委員会

「推進事業検討会議」

構成員：高校教育課（参事、担当者）、外部有識者（2名）、教育研究所教育相談部（2名）
道守高等学校（校長、教頭、担当者代表）

「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」の運営に関して、専門的見地から助言、評価、および進捗状況の管理・監督にあたるために開催する。

第1回　5月31日

【会議開催の目的】

①本年度構成員の交代が数名あったため、まず本事業の１年目の取り組みについて、特に教育相談を中心とした取り組みについての報告を行い、ここまでの共通理解と検討を行う。

②２年目に入って新たに取り組みを始めたこと、つまり生徒支援シートを用いての全教職員で進める登校生徒の継続出席や欠席防止の取り組みについて、第１回グループ研究会と全体研究会が終了したこの時期に報告することで、その妥当性について有識者および県の担当者から意見やアドバイスをもらう。

【外部有識者からの意見】

［意見１］登校生を対象としたこの事例検討が教員の力量形成には必要だと思っている。その事例検討のなかで、何が良かったのかが出てくるのではないか。もちろん家庭要因があり、学校だけのかかわりではないが、このような傷つき体験を多く持っている生徒は教員とのつながりを持つことでそれが埋められていく。ポジティブな方向へアップデートしていく方向に行くようなストーリーがあるように思えるので、やっぱり通信制でしかできないことだと思う。その事例検討の中で、シートがどのように活用されたのかという議論も当然出てくるだろうし、さらに発展的な取り組みになるのではないかと期待している。

［意見２］事例検討会を継続していく中で、先生方の意識が「このシートってすごく効果的だな」と意識してもらえれば、書き込みは増えてくる。また相談室が手紙を出して返事をくれた生徒が、相談室との繋がりから学校に来ることが可能になるということは、人との繋がりがあるからこそ学校に登校するという証である。担当者一人ではなく、誰がつながるのかわからないが、関係している先生が繋がっていくのである。目の前の生徒だけでなくまだ見えていない生徒に対しても、複数でかかわっていくことが大切である。

［意見３］「通信制の授業は、通常の学校の授業とは違っている」という説明があったが、その視点は大切だ。「通信制とはどのような学校ですか」と聞かれたときに、全生徒が最終的にこの学校の授業の良さに気付き「通信制ってこうだよ」といえるような学校になることがゴールである。通常の学校ならば不登校状態になった生徒が、少しずつ学校に登校できるようになった際、一斉授業を受けることができるようになることがゴールだとされてきた。しかし、ここはそういう学校ではないのだと思う。生徒自身自らが社会と関わり合いを持ちたいと思うようになり、人と繋がり、また知識を獲得していく。そういう根底にある営みがこの学校では行われているのだと思う。そうなるとこれまで彼らが持っていた学校の概念を崩し

つつ、じゃあどうやって生きていけばいいのか、どうやって人と繋がればいいのか、ということを生徒も教師も理解し、学校ではそれを提供していく必要がある。人と人とのつながりを持てる学校をどうやって作っていくのか、またどういう風に世間に発信していくのかということが、最終的に求められる。
［意見４］今はアクティブラーニングと盛んにいわれているけれども、通信制の授業の中でどういう営みがいいのか、彼らが主体的に学ぶことができるようになるには、どうしたらいいのか、その辺のことも考えていけたらいい。シートに記入することで先生方は授業の見直しもできるのではないか。たぶん、生徒が良くなったという授業中の書き込みの中に、そのことが潜んでいる可能性がある。その先生が何をどう発信して、生徒の意見をどう引き上げたのかというところまで突っ込むことができれば理由がわかることがある。
［意見５］高校ならではの制約と、実態との狭間で難しいことが多い。生徒のペースに寄り添いながら多様な学習環境を満たすというところが、通信制の課題であると思う。どれだけ生徒に歩み寄りながら制約をクリアしていくのかということがポイントになる。これまでの概念を、本当は全部取っ払ってしまわないとこの事業の成果はなかなか出てこない。

第2回　3月6日
【会議開催の目的】
①本事業の２年目の取り組みについて、報告を行う。また、ここまでの検証を行う。
②本事業３年目の取り組みについての方向性を知らせ、その妥当性についての意見やアドバイスを有識者および県の担当者からいただき了解を得る。

「外部専門委員会」
構成員：高校教育課（担当者）、外部有識者（2名）、道守高等学校（校内推進委員全員）

各委員会で話し合われた内容について、スーパーバイザーとしての有識者から、客観的アドバイスを得て、支援方法を学び、支援体制の構築をめざす。さらに、生徒が学校外の支援機関や組織に繋がり、社会支援を受け自立に結びつく可能性を高めることをめざす。

第1回　7月25日
【会議開催のねらい】
①本年度の取り組みについて、ここまでの途中経過を外部有識者に報告することで意見とアドバイスをもらう。また「教育相談の取り組み」と「全教職員ですすめる登校生徒の継続の取り組み」を分けて報告を行う。
②開催時期については第２回グループ研究会、全体研究会が終了した時期とした。生徒支援シートがうまく活用方法とか、研究会の持ち方とかについて、できるだけ早い時期に意見をもらうことで必要ならば早めの軌道修正を行いたい。

【外部専門委員からの助言】
①教育相談の取り組みについて

〇基礎的なデータは必要であるし、焦点化して支援していくことも大切なことである。継続的な取り組みにするには、本日の会議での説明を記録として残していく必要がある。後々担当者が交代になったときわからなくなってしまう。
〇27年度の取り組みと28年度の取り組み生徒のつながりをはっきりさせるべき。継続して支援している以外の生徒が現在どうなっているのかが資料からは見えてこない。
〇保護者支援が必要になると思うが、どのように支援していこうとしているのかが大切だし難しい問題になる。労多くして益少なしかもしれないが、成果を求めながら試行錯誤でいいのでやってみる必要がある。保護者はわが子にどう接していいのかがわからないのであるから具体的な体験談が参考になるのかもしれないし、ニーズを読み取ってそれに応じた取り組みができるといい。
〇「何らかの支援を考える必要がある。」と判断している生徒の、何らかの支援については今後どうするのか？担任と連携して行っていくのか。例えば、11番の生徒で母親が「ゆっくり見ていきたい」と言うのについて「どうゆっくり見ていくのか」ということを保護者支援と結び付けて考えることができる。13番の生徒だと、「毎朝欠席の連絡有」とあるが、単に「欠席します」「はい、わかりました」ではなく、一言二言会話を交わすことも可能である。何か皆で手がかりを出し合って「じゃあどうしようか」という知恵を出し合う機会がほしい。全部の生徒については無理だが「何だかの支援を考える必要がある。」と判断している生徒については考えてみてほしい。そうしていくうちに、何が大切だったのかということが先生同士で共通理解できてくるようになる。

②全教職員で進める登校生徒の継続的な取り組みについて
〇グループ研究会や全体研究会の場で担任が一番気になっている生徒の話題を出すというのは、担任を支援していく良い方法である。教室に気がかりな生徒が一人いるだけで担任は辛い思いをし、疲弊していくので、自分の思い通りにならないとか、やっただけの効果が得られないということを吐き出すことで、わかってくれる仲間がいるということを再認識できることは貴重である。
〇担任が気になる生徒について話をした後で、周囲がどのような声掛けをしたのかを記録に残していくと良い。担任の気持ちを思いやった言葉もあるであろうが、「こういう視点で見たほうが良いのでは」といったような少し助言に近いような言葉があったかどうかが、生徒に対する支援につながる大切な一歩である。その先生の子供のとらえ方の傾向性を本人が自覚する機会にもなる。
〇支援シートについて毎回同じようなことを書くのは大変なことであるが、例えば毎回寝ている生徒について、その生徒が寝なかった10分があった時に毎回書いてきたことが生きてくる。小さな発見が、いかにその生徒にとって重要であったかという意味づけにもなる。書くことがないからといって白紙にするのではなく、気になる生徒については繰り返しでもいいので書き続けることが大切である。
〇最初から生徒を何とかしますよ、と目標を持たせるのではない。研究は始まったばかりなので、語り合いのなかで、先生方がこれまで試したことを語って、それに対して周りがどういう言葉かけをしてあげられるのか、そこの記録を残すことがむしろ研究の近道になる。

第2回　2月7日

【会議開催のねらい】

①第1回外部専門委員会でいただいたご意見をもとにこれまで実践してきた研究について、その成果をまとめた中間報告書の記述が適性であるかどうか指摘をいただく。

②来年度以降の研究の持ち方についてもアドバイスをいただく。

【外部専門委員からの助言】

①教育相談の取り組みについて

〇不登校生への支援はたいへんだと思う。教育相談委員会がどういう組織で、どう支え合ってきたのか、何を悩みそれをどのように乗り越えてきたのかを周りとシェアーできないか。組織をどう動かしていくのかを考えることで壁とか成果が見えてくる。

〇６頁に新組織図があって、本年度における二つの研究会の足どりも示されている。４回分の記録があって、４回を通して先生方の生徒に対する意識がどう変わっていったのか。同じように教育相談委員会が全体とどうつながってどう有効に機能しているのか、全身全霊で取り組まれているのが全体にひろがっていくといい。

〇成功例がどういうふうに担任、教科担任に引き継がれどうしているのかが読み取れるとよい。成功例をどうひろげていくかが大切だ。

〇スクールカウンセラーにグループ研究会に参加してもらったらどうか。

〇一人で頑張るのはなくした方がいい。担当者がいる間は大丈夫と考えてしまうようにしてはいけない。担当者を支え、ともに学んでいく機会を設ける必要がある。担任と連携しグループで語り合える機会は、ひんぱんに用意した方がいい。

②全教職員で進める登校生徒の継続的な取り組みについて

〇研究主任が下ろすやり方ではなく、推進委員４人が徹底的に話し合って進めていったことに意義がある。グループで交換した話を全体にあげ、またグループに戻すことで共通意識を作るのに大きな効果があった。

〇支援シートについては、何をどうしたか書くことと話し合うことを共有することで、先ず生徒を見る、書く、話し合うことが保障されている。見なければいけない環境を作り、書くことで整理し、自分がどういう立場にいるのかを確認する。研究会のなかで私たちが生徒をどう見ているのか、他の人は生徒の何を見ているのか、自分の足場を確認しながら足場を作っていくことになる。

〇生徒が提出したレポートと生徒支援がつながるようにはできないか。通信制教育において、教員の専門性をレポートを通して生徒の支援にどう展開できるのか考えてみるのもいい。

③事例研究会について

〇最初から事例研究の例をドーンと出すと腰がひけるので、エピソード的なもの、例えば、「おはよう」と声をかけたが、その生徒は知らん顔したので、こう対応しました、というようなものから始めて、ハードルを低くしたほうが良い。やっているうちに自分を知る機会になるし、事例研究を面白いと思っていただけるようにもなる。

〇小中では実践を書いてそれが紀要になったりする。授業についての実践記録はないのか。あればそこからアイデンティティーが見つかったり共有できたりする。
〇気がかりな生徒への接し方は、ベテランは体で覚えている。言葉にしてないので次に伝わり辛い。研究で言葉にすることで専門性を自覚し、伝えることで向上する機会となる。あえて言葉にする機会があればあるほど、あの手この手で工夫して、道守独自の事例研究になるはずだ。
〇事例にある彼の変化は大きい。生徒を誘導するような意図を持たずに接すると、どんな会話になるのか。「いつから来る」「なんで来なかった」とあえて聞かずに、実際にどんな会話をしたのか。彼に寄り添うことを会話のエピソードとして書くと一般の先生方にはよく分かる。

②先進校視察

日　時　平成２９年　１月１９日（木）１３：００～１５：００

訪問先　科学技術学園高等学校〈東京本校〉　東京都世田谷区成城１－１１－１

内　容　最初に定時制課程の概要や説明を受けた。定時制課程については、プロジェクターによるスライドを用いた説明であった。概要説明後、主に定時制課程で学ぶ生徒の様子や校舎内の環境などについて、巡回しながらの説明を受けた。整った視聴覚機器類を駆使した授業の様子がうかがえた。廊下ですれ違った際も生徒の方から「こんにちは」といった挨拶があった。

後半は、口頭による通信制課程の概要や説明を受けた。三つのコースについての詳細な説明や生徒の様子について理解できた。以下に話し合った内容等について詳細に報告。

（１）学務に関する内容（学籍・学習システム…等々）

・都内では珍しい昼間定時制の男子校であり、生活指導が厳しいことが中学校にも周知されておりその事を生徒も理解して入学するとのことであった。部活動もたいへん盛んである。通信制は、定時制と同じ教科書を使用しており、通信制の教員は定時の授業も担当している。定時制の実践をフィードバックしてレポート作成にあたっている。
・定時の研究は、学習意欲の回復を目指したものであり、学び直しをさせるため週５時間、総合基礎Ａ（英語・数学・ＣＡＴ・ＨＲ）の時間を設定し、生徒が主体的に勉強に取り組む体制を取っている。
・生徒の状況に合わせて、週４の通学コース・週３の通学コース・ｅラーニング（半年に２回テストに来るのみ）など細かく分かれており、学力の低い生徒に対しては教材を作成して予約制で個別対応したり、宿題を課したものについての小テストを行ったりして学力の定着を図っている。
・定時から通信への転籍は試験無し。
・生徒の傾向について

ほとんどの生徒の表情が明るく元気であり、自ら挨拶を交わす生徒がほとんどであった。授業の様子を拝見したが、主体的に学ぼうとする生徒が多く、顔を上げて指導者から提示された電子黒板やモニター画面を見る様子が、複数の教室の生徒から確認できた。調理実習（フードデザイン）も生徒同士会話を交わしながら取り組んでいた。

（２）研究に関する内容

①研究の体制

・スクールソーシャルワーカーとの具体的な連携体制については、スクールソーシャルワーカーは月３回カウンセリングを行う。対象は通学コースのみで、希望があれば保護者面談も行っているという説明だった。ＳＳＷの支援内容ではなくＳＣとしての役割中心だと感じた。

②研究の実践

・研究成果としては、生徒に合わせた教材の工夫によって分かる体験、やろうとする意欲を持たせることができているのではないかと感じているという回答であった。

（３）その他

①通信制高校の生徒の不登校状態の対応

・通信制課程には「通学コース」（週４日登校）・「登校コース」（週３日登校）・「ｅラーニングコース」（自宅学習中心で年２回登校）がある。「通学コース」中心の説明を受けた。３学年で約３０名いて、５名の生徒が一度も授業に出てなかったり、途中で来なくなったり、登校がおぼつかなかったりしている。欠席している生徒の状況は本校とあまり変わらない。それらの生徒についての具体的対応策の説明はなかった。ただ、駅前に「Ｄ棟」というフリースクール的な学習の場も有り、狭いスペースで少人数のため、こちらの方で学習する生徒も多いということである。生徒の状況に応じて、コース分けをしたり、学習の場を複数準備したりして対応の工夫をしていた。

②卒業生の進路状況など

・基礎学力の底上げを目的とした取り組みや指導に加え、今後は一定の学力を有する生徒への卒業後の進路を見据えた指導計画を展開していかなければいけない状況が発生しているとのことであった。具体的にはこれから段階的に取り組んでいく予定とのことであるが、大学や専門学校への進学を目指す生徒への指導であるとのことであった。こうした新たなプロジェクトや計画に取り組む際には、理事長を中心としてチョイスされたメンバーが寄り集まって企画立案を行っていく、との回答であった。

③校舎内の教育環境（視聴覚機器類等）

・ＩＣＴ教育に取り組んでいる学校として、教師も生徒も機器類を操作しての授業を展開していた。参観した授業は数学と英語。校内はWi-Fi環境が整っていた。また、授業や家庭学習で活用する動画教材等を、教師がオリジナル制作している（動画には教科担当者が登場）。生徒タブレット端末から必要に応じて学習動画サイトへ繋が

るシステムなっている、との回答であった。

③事例

１の１　繋がりのきっかけ作りができたＡ男

・Ｈ２７．４月転入学(福井市内全日制高校より。１年生の欠席数142日(11/1～休学72日))
・本校在籍２年目。１８歳(平成29年2月現在)　　・家族構成　父・母・妹・本人
・過敏性胃腸炎。自分の汗の臭いに敏感。対人恐怖症に近い症状有り。心療内科受診(１回)、教育研究所相談課で面接経験有り。
・本校では１年目の合格者登校日と入学式に来てその後欠席だったが、最後の終業式の日にＬＨに出席する。２年目の始業式・新任式・離任式とＬＨに出席するがその後欠席する。
・１年目、２回連続欠席生徒の家にアンケートを送ると、本人から返事が有り、面談を希望する。面談日希望日時は本人からショートメールが届き相談係と調整して実施する。

１．はじめに

Ａ男は自ら面談を希望して相談係に結びついた生徒なので、面談が単発に終わることなく継続できるよう寄り添っていきたいというのが当初の目標であった。そしてできれば登校するきっかけができればいいなと思い面談をスタートさせた。

２．１年目(平成２７年度)の様子(相談室で１４回本人と面談を実施)

面談初日、かなり緊張しているものの、中学時代の欠席状況、前籍校での不登校とそのきっかけ、本校に来ようと思った動機について詳しく話す。「学校に行こうとするとお腹が痛くなるのは、体がまだ去年のことを覚えているのだと思う。」と言う。自分の状況を分析して話すことは２年間変わらず続いている。まず「何事もなく登校できたらいいなあ。」と話したが、次の面談では、少し強い調子で「授業に出るのはちょっと違うと思う。もう少し鬱っぽいのが改善できたらなあと思う。」と話す。面談時には本音が言えなかったり、帰宅すると思いが変わったりするのではないかと感じる。こちらの思いで話を聴くのではなく、Ａ男の思いを受け止めたいと思いながら面談を続ける。

また「休むと安心するがすごく傷つく。自分は学校に行くこと、社会に出ることを先延ばしし、同級生とどんどん差がついてくる。ずっと夜考えて泣いてしまう。」と深いところまで苦しい胸の内を吐き出す。Ａ男の思いはこちらが想像している以上に深いものがあり、簡単に解決できるものではないと感じ、とにかくじっくり聴くことを続ける。

Ａ男は自分の目標や理想的自分を話すことがあり、「来年18歳になるので自動車学校に行く」「バイトをしようという目標ができた」「学校にいきたい」、前期末には「後期はレポートももらいたい。後期やれることはやっていこうかな」と言う。先の目標を作り自分を安心させたのだろう。しかし、それらの目標は叶うことはなかった。常に、やるべきだ、しかしやれない、の間で揺れ動き苦しんでいた。

新年明けて、昨年を振り返って感想を聞くと「環境が変わったし考え方も変わった。今ま

ではやれなかったことを気にして焦っていた。今はやれることとやれないことは違うから、それを考えてやっていこうかな。こうやって話をしたから変わった。だいぶ楽になった。」さらに年度末には「今年度はいろんなことが解決した。」と前向きに話した。相談係の気持ちを汲んでの発言かも知れないが、面談継続を希望しているので、１年目の目標は達成できたように思う。

来年度は授業も受けたいと今は話しているが、いざ授業に出るとなると身体が抵抗を示すこともあるので、焦らずよく気持ちを確かめながら引き続き丁寧に関わっていきたいと思う。

３．２年目（平成２８年度）の様子

①初めて母親と面談

スクーリング初日の始業式等に出てＬＨにも参加した後、相談室に来る。久しぶりに登校し、しかも学校行事と学級活動に参加してかなり疲れた表情で入ってくる。「廊下で男子２人にからかわれた。」と言う。そして「今は日曜日授業に出ようと思っている。平日の面談は今年も続けたい。」と言う。私もその方が状況を知れるし何か困ったときできることがあるかも知れないので助かると伝える。３日後母親と2人で来室する。初めて母親と会う。母親は「本人が集団の中に入るのがまだ無理だと言う。病院で治療をして薬を飲んですっきりしてから学校へ行こうかと話し合った。病院を紹介してもらえたらと思う。自分は今まで子どもの先に出てしまうことがあるので、昨年は一人で面談に行かせた。なかなか思いを全部言えないんだと思う。またテストが別室で受けられると聞いて登校しようと思ったようだ。」と話す。母親に授業は無理だと伝えてもらいたかったのか、母親を私に繋ぎたかったのか、母親と一緒に来た真意は分からないが、授業に出るのは難しいだろうと感じる。

②“教室”が怖い

前回依頼があった病院を紹介すると「病院は僕自身も行った方が良いんじゃないかと思う。根本的に人とは怖いなあと思うときがあった。それに“教室”というのが嫌い。人がいる所が苦手。教室の人数が１０人以下とかなら、大丈夫かも知れない。」と言う。「始業式の時は午前中だけだと覚悟して出られた。これだけ我慢すれば、と思った。しかし、我慢して無理すると、後でズンと来る。次が怖くなる。動けなくなる。」と素直な気持ちを話してくれる。

始業式に来られて授業にも出られそうだったのに、男子２名にからかわれた恐怖心から登校できなくなったのではないか。登校初めの想定不足準備不足で取り返しのつかない状況になってしまったと思い、正直に「この前のからかいで怖くて学校に来られなくなった？」と尋ねた。するとＡ男は意外な言葉を返した。「あれは僕として思うことがあった。それが大きいものではない。ああいうことに遭遇すると、スイッチが切り替わって、周りが見ている。周りの全てが敵に見える。すごく居心地が悪く逃げ出したくなる。自分の中でもあのことで学校に行けないのではない。その後に、周り全体的に嫌な感じがして怖くなった。」私自身少し救われた気がした。さらに「病院に行っても僕としては内心治らないんじゃないかと思っている。ただちゃんと診てもらって、受け入れようと思う。」「授業に出られるかどうか分からない。仕事に就きたいと思っている。就職活動するにも中卒では就きにくい。祖父に陶芸を教えてもらおうかと思う。陶芸は取っつきやすく、心理的に楽。」と気持ちを吐き出す。何か自分がやれること自分の道を探していると感じる。何か目標を作ることで気持ちを楽にしているのではないかと感じる。

③心療内科に通院

紹介した病院に行き、カウンセリングを受けることになったと報告してくれたので、感想を聞くと「わりと良かった。」と言う。通院を始めて２ヶ月後「病院に行くことは緊張しないけど診察を待つ時間、待合室にいるのが辛くなる時がある。混雑していてみんな静かで、ドアも閉め切ってあって、落ち着かなくなった。待合室の外の椅子で待つことがある。」と言う。カウンセリングで話したことをグラフにまとめてくれていて「徐々にマイナス思考が減っている。」と言われた。病院に対して前向きだったと思うが半年後の10月下旬の面談では「通院を辞めようと思う。」と言う。疑問に思うことがあった。「患者同士のミーティングをしよう。」と言われた。半ば強引だった。１回五千円が負担である、と話す。面と向かってノーと言えないが、頑として聞き入れられないところがあると感じる。強引な誘いには強い拒否反応を示すことやお金に対して敏感なことも、これまでの行動から理解できた。

１月母が怪我したときは病院へ付き添っている。病院の待合室は苦手ではないかと尋ねると、「病院は自由で好きなときに出入りできるから教室とは違う。病院はゆっくりできる。しかも1回だから。教室は共有しなければならない。排他的で逃げ場がない。」と答える。自分が主体で継続して拘束される場にいることは難しいのかもしれない。まだ、それだけのエネルギーがないのかなと思う。

心療内科の通院を辞めた後、母が参加した「保護者のつどい」の時の本校スクールカウンセラーと面談を受けたいと申し出があったので、面談の機会を作る。わりといいと思ったと感想を言うものの、その後の面談依頼はないが、カウンセラーを気遣って「その後面談をお願いしていないのは、予定が立てられないだけなのでよろしくお伝えしてください。」と伝言を依頼される。

④自己分析

ＮＨＫ 通信制高校の資料を取り寄せていることや高校認定試験について尋ねるなど、何かにチャレンジしたいと話すが、やり始めてもなかなか続かない。その理由が面談を通して本人の口から語られている。変化の少ない生活の中で溢れんばかりの思いを抱きながら、少し整理したり吐き出したりするために相談室に来ているのかもしれない。

<一度止まるとやり直すのが難しい>

心療内科でスケジュール記録表をもらったが生活リズムが狂ってきて、一度辞めると全部狂ってしまう。それを元に戻すのに、すごいエネルギーがいる。やるときは毎日やる。１回途切れるとダメになる。間が飛ぶのが嫌。やり直して始めるのにすごくエネルギーがいる。前籍校を休んで間が空いたとき「まだ大丈夫や。」と言われたが、性格として途切れたらやり直すのが難しい。やっていない日の行動パターンにすぐ順応して、やっていない日常に切り替わる。家にいるのも楽では無いが、「家にいて苦に思うより、外に出て苦に思うことが圧倒的に多い。ずっと家にいると鬱々とするが、でもその方が外に出るよりマシだと思う。」

口でやろうとか言えても実際できるかどうか難しい。最初「やろう」とすることは何も考えずできても、ドンドン緊張してきて２歩目が出ない。

<「お利口」でいようとする>

例えば「大丈夫ですか？」と言われると「大丈夫です。行きます。」と言ってしまう時がある。それは、ずっと“お利口”と言われていたから、そうやって返すのがお利口だと思ってしまう。これは一つの欲でもある。でもそれは自分を傷つけてしまう。そして、相手と話す

のを無意識に拒否していた。「大丈夫で無い」と言うと「なんで？」と聞かれ、理由を言わないといけなくなる。人と話すのは嫌いでは無い。少し開放される。言っているときは多少報われた感じ。言っているときはその意見だな、と思うが、あとで「あれ？こう言うんじゃなかったんじゃないかな」と思って夜眠れなかったこともある。
<コミュニケーションが苦手で、言い訳をする>
　今困っているのは資金が足りないことだと言うので単発のアルバイトの話をする。草むしりの話をすると、「仕事内容はやれないことはないと思う。そこに辿り着くまでが…。仕事をするのにできないことがあると、指導を受ける方が楽だと思うが、コミュニケーションが苦手だから、できない。と言い訳をして、やらないということは自覚している。」少し楽になって“ほら”を言うこともある。病院みたいにトントンと進められるとついて行けなくなってしまう。何かをしようと思ってもそこまで心が振り切れない。
<今はオフの中にいる>
　小さい頃から「絵が上手い」と言われプライドを持った。今は冷静にそうでもないかと思う。やはり壁があって練習あるのみ。絵は以前は楽しく描けていた。今は気合いを入れないと描けない。それは、今は日常のニュートラルがオフなので、絵を描くのがオンにすることになる。以前は絵を描くのがオフだから楽に描けた。

　慎重に自己分析をして話す内容は説得力があり、言葉できちんと表現できることにすごいなあと思い、A男にその都度感動を伝える。A男は自分のマイナスの状況をも打ち明けることが昨年以上に増え、より自分の思いを話せるようになっていると感じる。
⑤月曜スクーリングに出ようかな
　今年度当初少人数なら授業に出られるかも知れないと話したので、後期始めの面談で「月スクが取れる環境を整えたい。もちろん出るか出ないはその時決めれば良い。」とこちらから話を切り出すと「月スクは出られても日スクは出られない。」と言う。日スクに出ることまでは思ってなかったが、A男はこちらの気持ちを先読みして予防線を張っているようにも思う。やはりこの日はかなり疲れている感じがする。何かをやり始めようとするエネルギーが出ていないと感じるので、こちらから提案せず様子を見ることにする。
　12月の面談で「来年のことをぼちぼち考えている。ただ日曜日は難しい。人数の少ない月曜日を考えてみようかな。月曜日に授業を受けて、その後ここ相談室で面談を受けたらと思う。母も月と木が送れるよう調節を考えている。何もせずに過ぎていくのもちょっと…。こうやっているうちに社会から遠ざかっている気がする。」と自分から話題に出してくる。実際授業に出られるかどうかは分からないが、今はやりたい気持ちが高まっているのだろうからその気持ちに添いたいと思い、登録可能になる環境を整えることにする。月曜スクーリングは３年卒業を可能にするために設置されたシステムであるため、日曜スクーリングが取れてない場合にも受講が可能になるように教育課程委員会で提案し特例として承認してもらう。その後担任と次年度の登録案を話し合い、最終決定はA男に委ねることにする。
⑥意識にこだわらず、“形”からはいってみよう
　前々からやろうと思っていたパソコンを買い換えようと思うと話す。前はそうは言っても何もせずにいたと振り返る。何かをやろうとすることはよく話してくれたが、できなかった後の再チャレンジの話は珍しいので、今かなり調子がいいこととエネルギーが貯まってきて

いるのではないかと推察する。「既にパソコンデスクは買った。今までは美意識？意識にこだわっていた。今度は“形”から入ってみようと思う。逃げ出せない状態を作ってみた。自分はまだまだ勉強不足だから本格的にやりたい。環境を変えたい。」さらに知人のボランティア参加の意欲も語った。今の気持ちとして受け止め、こちらからの意見は避けた。

４．まとめと考察

Ａ男は昨年の面談初日「登校できたらいいなあ。」と言うが、その後すぐに撤回し、「前籍校に入学する際、内心行ける気がしなかったが、周囲が言葉にしないが行ってほしいんだろうなあと思って、受けた。」と話した。そこで面談では、Ａ男がこちらの意図を考え、それに添うように、本音と異なる優等生的発言をしてもそれに振り回されないようにしようと思った。そのためにＡ男の言葉を穏やかに受け止め、Ａ男が安心して話せる雰囲気作りに努めた。Ａ男が最も気にしていることは「学校に行くこと」である。昨年末「学校に登校してみようかなと思う。」と口にした。私は黙って聞いていた。すると「実はテキスト全然手を付けてなくて。」と言うので、「へえーいいよ。全然。」と答えた。Ａ男は着手できない自分の性格を分析し話し始めた。学校に行くべきだと強く感じているのに行けないのである。私はＡ男に何かをさせようという意図はあえて持たず、敏感なＡ男の話に耳を傾けてきた。

そこで２年目は昨年度以上に自分のことを分析して話してくれた。その言葉はどれも説得力があり客観的に自分を観ていた。もう１人の自分が観ているように思えた。Ａ男は自分の頭の中で考えていることを話すことで、自分の気持ちを再確認し整理しているのであろう。慎重で臆病でプライドが高いＡ男は、心療内科では治せないと感じている深淵な闇に落ちることから何とか抜け出したいともがいている。Ａ男の話の中で今年度も昨年度も引き続き語られる言葉からもその苦しみが伝わる。「先が見えない。」「社会に出るのを先延ばしにし、社会から遠ざかっている。」「波があってどうしようもない時がある。」

昨年度は相談室で面談を受けることについて、Ａ男は「学校に来ると楽になる。」と言ってくれた。とても嬉しかった。そして今年度は「学校に来ないと不安になる。」と言った。たぶんどちらも素直に伝えてくれたと思う。言葉の意味としては前者の方が肯定的で前向きである。しかし、私は後者の方がよりＡ男の本音に近い言葉であろうと捉え、少し距離が縮まった気がした。たぶん楽になるのは一時だろうし、圧倒的に不安の中にいる時間の方が長いだろうと思えるからだ。

これからも丁寧に面談を続けながら、授業への参加に向けた関わりや授業出席の試みを通して、Ａ男がマシだと感じる時間が少しでも増えるようにしていけたらと思う。